

翻  
刻

里老傳常陸地理誌  
(みちくさ集)

茨城県立図書館

郷土資料整理ボランティアグループ

翻刻について

本書は、茨城県立図書館蔵書に基づいて、同図書館郷土資料整理ボランティアグループが、原文の読み下し、ワープロ入力、および編集を行い翻刻したものである。グループ作業に関する事務・とりまとめについては図書館情報資料課のお世話を受けた。製本にあたっては同じく同県立図書館の図書修理ボランティアグループに指導をいただいた。あわせてお礼を申し上げます。

平成二十八年一月

茨城県立図書館 郷土資料整理ボランティアグループ

金沢多恵子 唐沢矩子 金原ヒロ 木村寿子 辻雅子

中山真一 堀江克己 山崎弘道 柚原俊一 綿引文字

## 序

正式の名称を「里老伝常陸地理誌」、副題を「みちくさ集」としている。前者はしかつめらしい題名であるが、内容はそれほど学問的なものではない。後者の「みちくさ集」が親しみがある。内容からは「美ち艸」と同じものである。

右の「美ち艸」に記述した、「美ち艸について」と同じことになるので、ここでは原文に出る「みちくさ集の序」に補足を加えながら現代文に意識し、解説としよう。

「みちくさ集の序」では、

一八〇六(文化三)年六月に、箱に容れてある文書類を虫干ししたところ、手帳があつた。「したがって、この記録がなされたのは、文化三年より古いものである。」これは去る年、郡奉行を命じられて三郡の奉行を務めたとき、村長(むらおさ)・里人の語ることをその通りに書き付けたものである。開いてみれば、矢立の筆で歩きながら書き付けたところもあり、読みにくい。画の部分は山の姿や登山をしたときの眺望に、あわせて方位を知るために描いたものである。よくよく見れば、今は昔、現地のことを思い出して大変に興味を覚えた。

里人の話には疑わしいところも少なくないが、シミに食われてしまうのも惜しいことであり、離れの小屋で写しを作り「みちくさ集」と名付けたとある。

内容は多岐にわたるが、残念ながら聞き書きのままであり、一貫性・統一性に欠ける。裏付け・関連など調査の形跡はない。

それだけに、この書が原文に近いものと見られるのである。やや類似の書に「常陸北郡里程間数之記」(加藤寛斎書)がある。一八二二(文政四)年と十五年以上後の記録となるだけにか、詳細・詳述であり、「みちくさ集」を圧倒する。

堀江克己

## 写録注

読者の便を考慮し、本書では以下のように標記しました。

- 旧漢字は原則として常用漢字とした。ただし、固有名詞(地名、人名)はこの限りではない。
- 異体字、変体仮名は正字に直した。
- 読み仮名は原本と同様片仮名とした。原本にならない、本文同様の文語体である。
- 漢文調は読み下し、また送り仮名(ひらがな)を付けた。
- 仮名づかいは、原文の歴史的仮名づかいのままとした。
- 明らかな誤字は「ママ」とルビを振り、正しい字を( )内に示した。また明らかな脱字は( )を挿入して補った。
- 原文は句読点がなく書き継いでいる。読みやすくするため句読点をつけるべきところを一字あけとした。



ミちくさ集の序

文化三年ひのへとらの水無月篋中のふミとも曬せるに反故  
のうちに小きとちふミあり是ハさきのとし郡奉行を

命せられ三の郡をめぐり隣境をも一覽せし時むらおさ

里人のかたれるを其まゝに書つけたるにそありけるひらき

見るに矢立の筆もて道行なから書たるもあれはよみわく

へくもあらずことに画の事ハたへて知らされは見るさまも

あらされとも山のすかた或は登山の眺望に方位をしらん

ためのミに図したるなりつくつくうち見るに今ハむかし

其地のことなんとおもひ出していと興ありそれか中に里人の

かたれるふることあやしき事も少なからねともたゝに紙魚の

有となさんも口おしく北窓の睡りに倦るおりおりの筆す

さひし再い端さやうはし〜と集とあつくとと  
西澤 散人 古水戸藩中  
雨宮氏  
稻林入正門

松岡郡 寛政三庚年同古寅年とて田の学記あり

一 龍岡村古城跡あり中丸野と云ふ字跡 二 丸字と云ふ字跡 三 丸七と云ふ字跡  
四 龍岡と云ふ字跡 五 龍岡の代も廢せりと云ふ字跡 六 龍岡郡と云ふ字跡  
七 龍岡郡と云ふ字跡 八 龍岡郡と云ふ字跡 九 龍岡郡と云ふ字跡  
十 龍岡郡と云ふ字跡 十一 龍岡郡と云ふ字跡 十二 龍岡郡と云ふ字跡  
十三 龍岡郡と云ふ字跡 十四 龍岡郡と云ふ字跡 十五 龍岡郡と云ふ字跡  
十六 龍岡郡と云ふ字跡 十七 龍岡郡と云ふ字跡 十八 龍岡郡と云ふ字跡  
十九 龍岡郡と云ふ字跡 二十 龍岡郡と云ふ字跡 二十一 龍岡郡と云ふ字跡  
二十二 龍岡郡と云ふ字跡 二十三 龍岡郡と云ふ字跡 二十四 龍岡郡と云ふ字跡  
二十五 龍岡郡と云ふ字跡 二十六 龍岡郡と云ふ字跡 二十七 龍岡郡と云ふ字跡  
二十八 龍岡郡と云ふ字跡 二十九 龍岡郡と云ふ字跡 三十 龍岡郡と云ふ字跡  
三十一 龍岡郡と云ふ字跡 三十二 龍岡郡と云ふ字跡 三十三 龍岡郡と云ふ字跡  
三十四 龍岡郡と云ふ字跡 三十五 龍岡郡と云ふ字跡 三十六 龍岡郡と云ふ字跡  
三十七 龍岡郡と云ふ字跡 三十八 龍岡郡と云ふ字跡 三十九 龍岡郡と云ふ字跡  
四十 龍岡郡と云ふ字跡 四十一 龍岡郡と云ふ字跡 四十二 龍岡郡と云ふ字跡  
四十三 龍岡郡と云ふ字跡 四十四 龍岡郡と云ふ字跡 四十五 龍岡郡と云ふ字跡  
四十六 龍岡郡と云ふ字跡 四十七 龍岡郡と云ふ字跡 四十八 龍岡郡と云ふ字跡  
四十九 龍岡郡と云ふ字跡 五十 龍岡郡と云ふ字跡 五十一 龍岡郡と云ふ字跡  
五十二 龍岡郡と云ふ字跡 五十三 龍岡郡と云ふ字跡 五十四 龍岡郡と云ふ字跡  
五十五 龍岡郡と云ふ字跡 五十六 龍岡郡と云ふ字跡 五十七 龍岡郡と云ふ字跡  
五十八 龍岡郡と云ふ字跡 五十九 龍岡郡と云ふ字跡 六十 龍岡郡と云ふ字跡  
六十一 龍岡郡と云ふ字跡 六十二 龍岡郡と云ふ字跡 六十三 龍岡郡と云ふ字跡  
六十四 龍岡郡と云ふ字跡 六十五 龍岡郡と云ふ字跡 六十六 龍岡郡と云ふ字跡  
六十七 龍岡郡と云ふ字跡 六十八 龍岡郡と云ふ字跡 六十九 龍岡郡と云ふ字跡  
七十 龍岡郡と云ふ字跡 七十一 龍岡郡と云ふ字跡 七十二 龍岡郡と云ふ字跡  
七十三 龍岡郡と云ふ字跡 七十四 龍岡郡と云ふ字跡 七十五 龍岡郡と云ふ字跡  
七十六 龍岡郡と云ふ字跡 七十七 龍岡郡と云ふ字跡 七十八 龍岡郡と云ふ字跡  
七十九 龍岡郡と云ふ字跡 八十 龍岡郡と云ふ字跡 八十一 龍岡郡と云ふ字跡  
八十二 龍岡郡と云ふ字跡 八十三 龍岡郡と云ふ字跡 八十四 龍岡郡と云ふ字跡  
八十五 龍岡郡と云ふ字跡 八十六 龍岡郡と云ふ字跡 八十七 龍岡郡と云ふ字跡  
八十八 龍岡郡と云ふ字跡 八十九 龍岡郡と云ふ字跡 九十 龍岡郡と云ふ字跡  
九十一 龍岡郡と云ふ字跡 九十二 龍岡郡と云ふ字跡 九十三 龍岡郡と云ふ字跡  
九十四 龍岡郡と云ふ字跡 九十五 龍岡郡と云ふ字跡 九十六 龍岡郡と云ふ字跡  
九十七 龍岡郡と云ふ字跡 九十八 龍岡郡と云ふ字跡 九十九 龍岡郡と云ふ字跡  
百 龍岡郡と云ふ字跡

一 稲田村孝三傳 燦竹綱と

一 中根村小岩穴大木二河〜中河小十希五希のりと屋と云ふ人云傳あり  
一 平後村は護摩壇石といふと云 義公の命にて法澤  
石と唱ふ事あり 傳あると又ガ〜の芳小畜生浦といふと云あり 是ハ職  
名也や向ふてその石は皆南はむと云ふと云ふ人の名付〜と云

さひに再び端亭にうつしてミちくさ集と名づくること  
しかり

西沢散人 古水戸藩中

雨宮氏

俗称又衛門

松岡郡 寛政三亥年より同六寅年までの内の筆記なり

一 額田村古城跡あり本丸四千三百六十坪二ノ丸五千三百坪三ノ丸七千坪

あり額田久兵衛照通の代に廢せりくわしく松岡郡図にしるす〔図 省略〕

一 諏訪明神潰跡に大杉あり目通りにて二丈六尺五寸あり

一 稲田村年々御煤竹納る

一 中根村に岩穴大小二十二あり其中に十郎五郎のいわ屋と土人云伝るあり

一 平磯村に護摩壇石といふ有元禄九子十二月 義公の命にて清淨

石と唱可申旨 仰出さる又少し北の方に畜生浦といへる所あり是ハ磯

石皆北に向ふ其外の石ハ皆南にむかへり故に土人の名付しと云

一村松村 太神宮四月九日競馬あり長砂(河和間)高野(三ヶ村)より出馬  
虚花(雲)靈驗(元禄)之乙八月十日方(豊)お(南)部(山)左(井)村(何)督(念)を(東)  
廻(新)粒(風)に(連)繋(を)切(五)形(い)く(一)回(の)月(十日)方(経)目(十八)人の(發)  
の色(初)徳(光)と(渚)お(お)宗(組)す(八)人の(若)礼(来)い(く)一(波)野

義公の命を彫刻せし其室に秀抄をもちて古海申をもちて  
阿(志)本(浦)經(管)の(河)漕(ま)な(ま)く(入)毎(子)正(月)十(日)方(船)の(細)丸(和)き(板)と  
元(禄)十(五)正(月)の(仰)せ(く)目(の)尚(粥)と(其)年(祈)穀(乃)豊(凶)と(是)を  
事(あり)

一 茂官村の川朝(ま)の(ま)は(産)

一 幡村(市)平(上)の(五)日(曜)の(お)も(板)あり(上)板(の)板(を)て(二)方(計)と(び)こ(う)

中(の)松(四)間(わ)し(白)板(の)板(を)方(計)是(日)白(板)之(を)五(八)尺(申)と(あり)

一 大森村(瀬)谷(村)音(水)石(高)意(と)も(石)あり

一 村松村太神宮四月九日競馬あり長砂 須和間 高野三ヶ村より出す

虚空蔵靈驗元禄二巳八月十三日奥州南部小左井村伊勢屋与兵衛

廻船難風に逢髪カミを切立願いたし同九月十三日縁日に十八人の髪

の毛初穂共ニ渚へ打寄乗組十八人の者礼参いたし（候）次第

義公の命にて彫刻す靈宝ニ香炉一ツ有古海中より上りたると云

阿古木浦伊勢の阿漕になぞらへ毎年正月十五日朝一網ツゝひき候様ニと

元禄十丑正月より仰付らる同日筒粥とて其年諸穀の豊凶を見る

事あり

一 茂宮村の川鮒しゞミ名産

一 幡村市平といへる百姓の家に梅あり上枝紅梅にて二間計はびこり

中の枝四間ほと白梅下の枝七間計是も白梅也高さハ八尺計なり

一 大森村瀬谷村寒水石島寒水石あり

- 一 真弓村のりもまふふあり八木村現る南徳岩院を山年抄事あり、  
 生う山麓をうせむ丁のありて太の本立の中よはは洗あり  
 又少やうて籠るを阿つ大杉を三つ入抱あり板も五兩まこととて古文  
 五つ入畑もまお仁三門鐘あり延宝の年号あり植杉の社乃前は行堂あり  
 う夫のむすうりうてたのくすもらふ手笠石榑掛峯と云ふ是我家將  
 軍旗りの時ををけ榑とけ榑ひ」と云ゆふみとて丁ありて山王平  
 と云ふあり山波混金の地之石虎と云所をと控現徳澤のふといふ榑  
 七年生う山は有来りやウマの面 西山公より以後霞ら遊徳善院  
 へり不寛政元酉年六月晦日燧火を山の西の下よとありて同は年天有け辺  
 まであを木の子と云ふ山かめと云
- 一 長谷村密花院を山關八州大先達なり十二面觀音山門三王雲溪の作  
 と云ゆふ山門の内は年天堂あり鐘樓あり

一 真弓村にも寒水石あり八所権現別当徳善院本山年行事なり

真弓山麓より二十五丁のほる二十丁のほりて右の木立の中に御手洗あり

又少登りて籠り堂あり大杉有二丈八尺  
五人抱えあり椽にも五両もみとて一丈

五六尺廻る鳥居仁王門鐘あり延宝の年号なり権現の社の前に行堂あり

り夫より五六丁下りて道のかたはらに手懸石腰掛峯と云有義家将

軍旅行の時手をかけ腰をかけ玉ひしと云伝ふ又三四丁下りて山王平

と云所あり山海眺望の地也蔵クラと云所もと権現鎮座の所といふ元禄

七年真弓山に有来リヤウヲウの面 西山公より御修復被遊徳善院

へ被下寛政元酉年六月晦日焼失す山の西の下に寒水石の間に弁天有此辺

にてあを木の事を山かしめと云

一 長谷村密蔵院本山関八州大先達なり十一面観音山門三王雲溪の作

と云伝ふ山門の内ニ弁天堂あり鐘楼あり

一 田渡村の堰を築く村敷に田を五千五百畝不産あり

一 鴨籠村の由は伏山耕山ありて山半のた鴨籠板四万唐藥元来之能  
徳多化 東照宮は其處のたありて山の郡耕山寺の二堂作由は

祿良尚法親王の比曾之室物唐画山ありて進歩ありて同山水宋徽  
宗皇帝の画よきなり又作竹義敦寄附の常永画の鶴の畫ありて  
えふ或時唱たりとありて描毫うを同じ凡とまはと云傳ふてか様と空  
ありと云予ま鞋をつけくつししあり

一 里老を村楯ありて村敷は村よりありて田四畝石余

薩郡明神ニ市宝杉の大木の日ありて木ありて文字虫の喰たりあり

鹿嶋内ソウの本とあり

一 比片割は鹿島明神の社内ニ有と云ふ

一 白羽村伽羅石温石ありて大杉二か八幡を郎後宮松と云傳ふ

一 田渡村の堰水懸り村数二十四田高五千五百四十石余なり

一 瑞竜村内に沢山耕山寺あり開山堂の戸瑠璃板四方唐桑元来久能

德音院 東照宮御靈屋の戸のよし山門の額耕山寺の三字竹内御

跡良尚法親王の御筆也宝物唐画山水文進筆とあり同山水宋徽

宗皇帝の画と云伝ふ又佐竹義敦寄附の常永画の鶉の懸物あり此

うつら或時鳴たりとなり猫飛かゝり目へ爪を立候と云伝ふ其外種々宝

物ありと云予草鞋をつけて至りしゆへ不見

一 里野宮村堰あり村数八ヶ村水懸り田四千石余

薩都明神<sup>ニ</sup>神宝杉の大木のわり木なり文字虫の喰たる如し

鹿嶋御ソウの木とあり

此片割ハ鹿嶋明神の社内<sup>ニ</sup>有と云ふ

一 白羽村伽羅石温石あり大松二本八幡太郎腰掛松と云伝ふ今なし

板倉山大聖院十ヶ丁ありて石像の龍津あり白羽ありて観音あり  
り 西山公侍尊とて國春親の松ふ

山城と云ふそりそき(東山に海に相くそりそりも流る)

才丈の石も大なる濡佛あり種あり美濃の(号)もま物もつる  
かき徳却の耐渡もりの種のみ

義公のつらひと云ふ者貝と祝家あり八景の和歌松家流花鹿  
之留射探雲尊 竹の画東坡画讚日光凌瀧寺が納

讚 上林春曉 麥莊掃叟



達广の画昆修尊 蛇骨 九虎の鮑 米瑠璃内猪口十

西山公より出送物に石位不圓に下下動に石を動かして通に納るるの地  
雨夜伽西山大君板倉山より出南産

横の花ちりかひ曇る山古北へ木の澤よまき風を廻る

松倉山大聖院十八丁登りて石像の龍あり白羽石なり観音堂あり  
西山公御筆とて団扇形の板に

山城と国こそかはれ東山流ハ同じこゝも清水

方丈の左に大なる濡仏あり鐘あり承応の年号かすかに見ゆる  
小寺破却の時潰寺の鐘のよし

義公御つかひ被遊候青貝御硯箱あり八景の和歌掇家清花衆筆  
三幅対探雪筆 竹の画東坡画讚日光清滝寺より納

讚上林春暁

麦莊帰叟



達磨の画 毘修筆 蛇骨 九穴の鮑 米瑠璃御猪口十

西山公より御遺物ニ前住了円ニ被下置候由ニて右の通御納の品々の由  
雨夜伽ニ西山大君松倉山にて御当座

桜花ちりかひ曇る山寺の入相の鐘に春風そふく

一 茅根村 同法石 龍山 山あり

一 赤坂村 三ヶヶ石あり 堰あり 田あり 石あり 宗あり 寺あり

一 常福寺村 皇 山あり 山あり

一 町尾村 西河内村 斑石 出る 山あり 金山 跡あり 山あり

一 西河内村 菩提樹あり

一 東河内上村 玉蔵寺 龍あり 寺あり 尺幅一丈あり 龍あり 寺あり

画をとりて 宮まきあり 山あり 山あり 山あり 山あり 山あり 山あり

雨夜伽 西山大君 玉蔵の龍をたぬ

山形あり 山あり 山あり 山あり 山あり 山あり 山あり

山あり 山あり 山あり 山あり 山あり 山あり 山あり

山あり 山あり 山あり 山あり 山あり 山あり 山あり

一 坂野上村 薬師あり 清水あり 山あり 山あり 山あり 山あり

- 一 茅根村 間沢石 瑞竜山御用
- 一 赤須村 ミかけ石御留 堰水懸田五千六百石余二十七ヶ村
- 一 常福寺村 白土 分付山より出ル
- 一 町屋村西河内下村 斑石出る御留なり金山堀跡所々にあり
- 一 西河内中村<sup>ニ</sup>菩提樹あり
- 一 東河内上村玉簾寺<sup>ニ</sup>滝あり高五丈三尺幅一丈余あり絶景なり予  
画をしらす写す事あたわされとも大体を図して末に附す〔図 省略〕
  - 雨夜伽<sup>ニ</sup>西山大君玉簾の滝を御当座<sup>ニ</sup>
  - 山姫のくるや千筋の糸なかしつらぬきとめぬ玉たれの滝
- 御立山の内月山権現あり滝の後の山の絶頂<sup>ニ</sup>あり則利刀を鍛し所也奥  
州月山を移すと云羽黒山是も御立山にあり今ハ社もなし
- 一 坂野上村<sup>ニ</sup>葉湯あり湧水を居（据）風呂にして入る疝氣吹出杯によし

一 入四間村由岩山麓現寛永七年(一)官稱云々大目老常陸松本道者の話  
 發場龜形之末初め種播あり大目老の志に方々奥の院にあり  
 入四間古志の國上村なるにや山口は關氏今年家爲元祖竹の内中村氏  
年家才ういけよ推名氏年家十之元祖利ある空住は鈴木氏年家信濃と云依  
元祖右は家の家が富ありや又も同と云つけ一村ありやや一老人の話云々  
 之もあつたし元今終るや云々元おれり古文あり

お久畧云々  
 江戸兵部大輔  
 通長判

白川内館  
 關治部及  
 貴報  
 日 信濃守  
 通隆判

日おお月お云々  
 關治部及  
 政宗

一 大徳村野駒山去り七十九百四十石余 お手裏書 牧正九三六延宝六年十月

一 入四間村御石山権現寛永七年開闢なり大日堂常念仏堂道者の垢

離場竜形の不動あり鐘楼あり大日堂の左の方より奥の院へ至る

入四間ハ古東河内上村より分る此所ニ山口に関氏 今年寄 右馬之允祖 竹の内ニ中村氏

年寄 鴨之允祖 オウドチウに椎名氏 十之允祖梨子窪に鈴木氏 是ハ信濃と云佐 佐竹ニついて秋田ニ移る

右四家の豪富あるゆへに四間と名つけ一村になるよし老人の話なり

三年寄の内十之允今絶たり右馬之允所持の古文書あり

前文略ス 江戸兵部太輔

三月二日 通長判

同 信濃守

通隆判

白川御館

関 治郎殿 責報

同前 卯月二十一日 政宗

関 宗君

此字よめ兼候

土手受取



一 大能村 野駒山土手七千九百四十間余 三十五ヶ村 牧御取立ハ延宝六年午六月

有り堅弱めり元は延く六日の常中か防る堅弱元切をぬくはあふふあふ有之  
お嶽山 大能を岩杯や大川にや村村  
地蔵にて山に云を和し

一 中尾川 新田にて椎茸を作る椎茸を そ籠りてを中二三布か  
或中道くせたる 至終に

以糸附て以糸道中かて或業又位椎茸を身中付虫股十五位位より

十一位位分信を至約十五位位より小椎茸八位位位の内なり

一 黒坂村 堅破山 割不 長試か云云守  
孫考史云云 為帽石 二間をさる  
た久花 鼻石 物をとらと  
なすゆり

大岩 田目不今あやう不と云  
言す一なりと 坊石 田藤十七下花三有と云  
二むりし云ややん 舟石 志藤原にやうは片  
舟石花云是もやん

硯石 志藤原に云二石位  
むと云是もやん ワリ石 圓  
山若茸物さるる云

一 細谷村 小谷分山にやうしり付小石ありし 眺屋をさるるはゆり

一 大菅村 薬湯室暦五子ふゆり今云林とく(せり)

一 小菅村 小谷平と云云 燈台の遺蹟は 藤徳はさるる云林と云  
林と云

一 小伊村 鍋足山と云あり 中と云云  
中と云云 障の足のみ さるる云

なり野駒為御取被遊候ハ同八年中より始る野駒取切<sup>ニ</sup>成候ハ安永六酉三月也

土嶽山

大能鳥曾根中戸川三ヶ村付  
麓ニて廻り三里ほど

壺籠なり壺斗二三升壺駄<sup>ニ</sup>

一 中戸川新田にて椎茸を作る椎茸壺本

式斗近くまで入る 壺駄<sup>ニ</sup>

四本付<sup>ニ</sup>て江戸迄道中かゝり式貫文位椎茸壺斗<sup>ニ</sup>付直段十三匁位より

十六匁五分位迄平均十五匁位なり小椎茸ハ式匁位のよし

一 黒坂村 堅破山 割石

長式丈壺尺五寸  
横壺丈八尺六寸余

烏帽子石 二間に高サ  
九尺程

壘石

物をたゝミ  
たる如し

大きサ

今しやか石と云

二間程

高サ一間ほど

坊主石

西麓十七丁程二有と云  
二丈計と云予不見

舟石

東麓二有り四間  
程と云是も予不見

硯石

東麓二有二間四方  
ほどと云是も予不見

ワリ石ノ図



岩茸出る所有と云

一 細谷村より東金沙山<sup>江</sup>登りしか其時小雨ふりて眺望する事あたわす

一 大菅村に葉湯宝曆五年より始り今甚おと(ろ)へたり

一 小菅村に孫平といへる百姓有御先代御旅館になりと云おとろへたり

一 小中村に鍋足山と云ありするとき峯三ツ有て鼎<sup>カナヘ</sup>の足の如くなる故かくあり

あつて、そのやえ百部をきくは、中村より、その常陸の赤村より山頂

のたのまをいじり、石解あり、眺望の園末に記す

一 小栗村 樹を有し、村より雲母出、之を採す、之を採す、之を採す

無くして、此と云

一 徳田村 庄領地あり、玉塚、三塚の町、赤松の社、信牛の紋あり、赤松の社

より、次の村に大塔と云、奥の山に、赤松の社あり

一 笠石村 赤松の社あり、松の社あり、松の社あり、松の社あり、松の社あり

一 甲川村 赤松の社あり、三ヶ所の堂あり、山阿の常の奥の社あり、昆虫の園あり

記す、此の地より、赤松の社あり、赤松の社あり、赤松の社あり

一 岡見新田 赤松の社あり、赤松の社あり、赤松の社あり、赤松の社あり

一 柳澤新田 赤松の社あり、赤松の社あり、赤松の社あり、赤松の社あり

より、赤松の社あり、赤松の社あり、赤松の社あり、赤松の社あり

赤松の社あり、赤松の社あり、赤松の社あり、赤松の社あり

名つけたると見ゆ峯一ツハ小中村より二ツの峯ハ高倉村なり山頂

ニしのふ草いわ松石斛あり眺望の図末に記す〔図 省略〕

一 小妻村鋤ほと有此村より雲母出候元禄十三辰年堀たる事有色

悪しくて止むと云

一 徳田村御領境なり国境ニ堺の明神有社に佐竹の紋日の丸扇を付

たり次の村ハ大垵と云奥州白川郡なり

一 笠石新田より根小屋へ出る道の傍に大石有笠の如し故に名付と見ゆ

一 里川新田に三鉢の室といへる高山あり常州奥州の境なり眺望の図末に

記す此山の坂に雲母出る上品なりおしむらくハ少しく也〔図 省略〕

一 岡見新田ハ岡見弥次衛門御郡奉行の時の開発故名付

一 柳沢新田此所無高無年貢なり御領分境尚又木立繁りて猪鹿出

る故先年御弓御鉄砲御渡なりしか御弓ハ焼失後御渡しなし御鉄砲ハ

家数七軒人  
別三十人男  
廿人女十馬十二疋  
人



獵師筒になりたると云御境目に炭塚あり花園より築しと云 此新田より

他領ハ花園迄権現へ詣る能やしる也社の前に大なるかう□<sup>ヒ</sup>や榎二

本あり此山奥に井壺滝絶景の地といふ予ハ不見此山にかうやまきの

実生多くありといふ人跡たへたる所といふ花園村一円神領なり予か

帰る時ハ村の名主組頭なりとて大勢出るかゝミ居れりいつとてもかくの

通りと云へり此花園山故治承年中佐竹冠者秀義源頼朝の兵

を引受金砂山城郭やぶれて後此山にたて籠りたりと云

一 若栗新田享保十四酉年獵師庄三郎熊打留る事あり  
予按るにかの畑といへるハ

一 下君田村蕎麦の名物なりかの畑仕付候殊によし  
刈野畑なるべし

一 横川村大野田坪といへる所に石あり石炭にやくなり本郷より十二丁

計南に滝あり三段ニ落る大塚村への境とり上坂といふ眺望絶景の

地なり末ニ凶あり横川村より二十六丁上る大塚へ下り三十丁あり御茶屋

あまのつゆ

一 大塚村の畑の中イサキに石イサキ出る他領もあ田イサキもある又よお田イサキもある

一 西河内上村谷は多し一人三九十九火はと云

一 小倉村多動籠といふ籠と

一 白庭村に夢想国師座禪岩穴とてまき子穴とて百七有庵

ハ増井正字寺塔内は阿る知後尾を教とてりたると云穀苗番

ハあり舟渡一有

一 磯原村 天妃神阿る二島阿る 夷國舟もある商人二人争をまき人

まき杖打まきハ子村ハ名古方の園二ハ二りま隣村非園村ハ化領る

神是ハ新所二ハ中野 栗野村と云 名古方の園二ハ子切通一第

栗の境さう此是ハ真妙園郡園田村さう海と名園浦と云徳京

ありまの園あり子折通一ハ常妙園か上野村徳京和泉と云まの

場なり此時

一 大塚村の畑の中より石鏃ヤノねいし出る他領下相田よりも出る又上相田よりも出る

一 西河内上村谷津多し土人三百九十九谷津と云

一 小菅村ニ不動滝と云小滝有

一 白庭村ニ夢想国師座禪岩穴とて壱ツ弟子穴とて百七ツ有庵

ハ増井正宗寺境内にある幻住庵を願の上引たると云穀留番

所あり舟渡し有

一 磯原村 天妃神ありニツ島あり 異国舟番所あり番人二人金老両老人

半御扶持 先年ハ  
二人ふち 此村より名古曾の関江ニり有隣村神岡村ハ他領なり

神岡より 一ニ下野村栗野  
村と云 一ニ中野 名古曾の関ニ至る此斫切通し常

奥の境なり此先ハ奥州菊田郡関田村なり海を菊田浦と云絶景

なり末に図あり此斫通しハ常州関本下野村篠原和泉と云もの



承応年中奥州の商人申合きりぬきたるよし此辺おしなへて岩山也

斫通し巾一丈計長<sup>サ</sup>二十六間余あり篠原和泉斫通し頭取にて

こしらへ候故たゞりあるとて次第に衰微して嗣絶けり地脈をきり

たる故と云伝ふといふ斫通しの左り山の中段に小き祠を建てたゞり

を除んとて篠原氏毎年元日まつれりと云今和泉ハ跡絶たれとも

其類族ハ今にのこれるよし切通しの所を和泉坂と云切通し北の

方ハ七曲はかりの坂なり是より五六丁西の方に古のなこそこの関あり

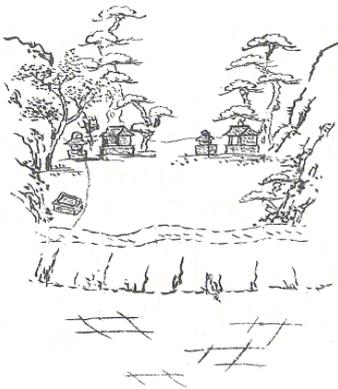
少しの松木立有石の小祠左右<sup>ニ</sup>あり

脇に石の五倫の様なるをのあり前<sup>ニ</sup>

一ツ手水石あり近比まで桜の古木

ありしかかれたるよし今ハ若木なり

二ツの祠ハ安部貞任宗任を祭りたると





土人の話なりいかゝなるや昔ハ此前の谷津田のところ往還なりと云此辺より桜石出る桜化石なり名古曾の関を出て右へ廻りて九面村同

所洞門ありこゝつらより平潟への境に洞門あり常奥の境なり長久保

赤水の立たる洞門の碑あり平潟村あり北嵐なれハ澳の中にて

船破るゝなり南風巽の嵐なれハ入津よし傍に花蔵院といへる寺有

八幡あり澳を眼下に見て景地なりひらかたより中野村へ行にも洞門

あり高井村へ行にもきり通しあり高井村ハ平潟より大津村江通る

所なり長久保赤水の説に此所多賀郡の始りなれハ此高井コホリなどハ高県

の本郷なるへしと思ハると云 赤水云 一ツ嶋イソハラ 二ツ嶋イソハラ三ミドウ涛 是より

天妃

大津四ツ浦 今ツルシ 五浦 六浦 今へビガシラ 七浦 今長ハマ 八浦 今ハ 九浦 コ、ウラ今九面  
ト云 ト云 ト云 ト云 奥州

按ルニ此説附会ナルヘシ名古曾関を詩人勿来関ト云

吹く風をなこそその関と思へとも道もせにちる山桜かな

源義家朝臣

一 柳波町の人を七軒人から三軒の人を根をたし一帯の上を核は  
 一と二と三と作るといふ一帯をたしし中にも三帯をたししおふ作を  
 阿波にたて置ることもなく強きといふ強の一時とたのきも負ふれども  
 耕作の早も合はなきを早魁といひる幸の早もより一帯は早も  
 くの早の早も本地核を業としはともむと軽き物より一帯より  
 一帯本核核物のもともなるものたのきより一帯より一帯より一帯  
 少一のたのきも一帯より一帯より一帯より一帯より一帯より一帯の  
 もとも一帯のたのきも一帯より一帯より一帯より一帯より一帯より  
 と一帯より一帯より一帯より一帯より一帯より一帯より一帯の内  
 一帯より一帯より一帯より一帯より一帯より一帯より一帯の内  
 一帯より一帯より一帯より一帯より一帯より一帯より一帯の内  
 一帯より一帯より一帯より一帯より一帯より一帯より一帯の内

一帯より

一 柳沢新田の人家七軒人別三十五人家に根太なし地の上へ大木を横に

し其上二竹なとならば申候蒞を敷申候まと二ハ茅を壁の所へおふち竹をあて結て其間をところとこころ繩を以て結ひて明りを取る無年貢なれとも耕作の品にて食にたらす世の早魃といへる年ハ取実よし三年に一年くらい実のる常に木地挽を業とす是も至て雑なる物はかり也予か至りし時木鉢の挽物の至て小なるにしいたけ三ツ乗せて出す余村にてハ少しのものなりとも受さる事なれとも余りに其志のやさしく支配のものも無年貢の地にて貢物もなき故か初て廻村のセつハいつもかくなりと云故もらい返れり山奥にて他村より嫁娶するものなし新田の内  
に相応なけれハいつ迄も嫁妻せすと云古ハ軽き罪人を此新田へ被遣たる事ありと云此時の組頭も三十余になりて妻なし庄屋ハ横川より

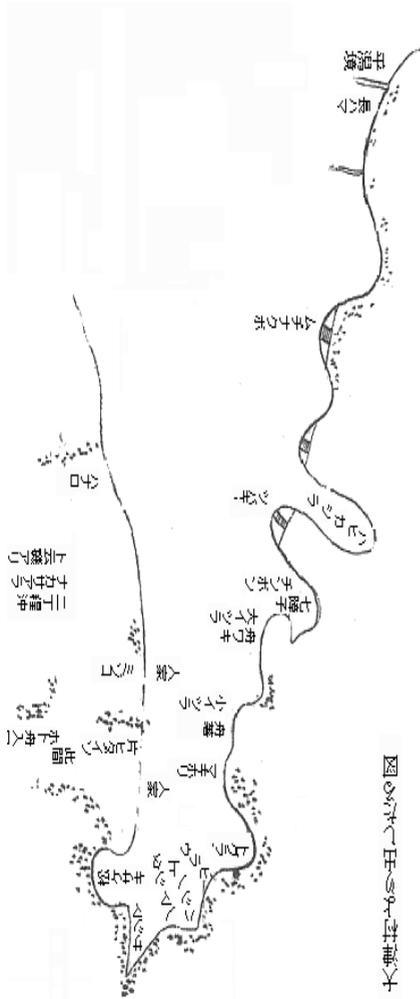
兼帯す

一 大津村 義公村の昆布と海舟とを以てせし遊を不器なる所と云  
 今な多し中浪の程を備へ昆布打とてその名と云蓋汗も強也  
 也也五瀬より見石岬の所の所も所 具の中(砂の入)りかきりなる  
 あり 松崎といふ所原を坊とて一系地なり 末は岡あり大津村と  
 仁丹岡村の境の川を里根川と云チヤンボと云ふる所(筆筒鼓洞  
 と号を名宛ありてその内へ流す込ミ一音ありなる)は村の領分と云  
 れ村のなるか穀入穀の村なり



一 大津村 義公松前昆布を海中へ御まかせ被遊候所絶てなしと云

今たまたまに大浪の跡にて渚へ昆布打上る事有と云遠沖ニも残れる也五浦より貝石出る外の所になし貝の中へ砂の入りてかたまりたるなり 松ヶ崎といふ所御茶屋場なり景地なり末に図有 大津村と仁井田村の境の川を里根川と云チヤンポンと云所有詩人簫鼓洞と号す岩穴ありて其内へ波打込ミし音あるなり此村御領分はなれ村なる故出穀入穀の禁なし



大津村の田舎の図

赤坂云大津村昔多を堀と云は村と仁井田村との間の上は長柄と云ふ  
近敷の軒は大津波を云ひは後より近年半段の地銀も昌と云

一 下橋安村八宝曆十一年は数々の舟が通る村松の坊風難あゆめ舟  
はりてを云ふ

一 坂本村のんを建市市花道を規と大川く武井甲放りしとの道  
をくくろりたる云

一 上橋弁村を建八分次といふもの極物切者存あり永らる年木橋樹が極  
れおよ成長いし一もろく村にや

一 日棚村は山の内石切場と云ふより極物出するは為なり

一 上野隈村を寺飯と云ふは山ありて玉曆は手堀初なる間もた  
下手隈村故城ありたり山と云はは松と云米と云七の戸伏古来少進  
政盛領主元和の年出羽形居る種と同年少領分となる赤坂作の常北

- 赤水云大津村昔鳥屋塚と云此村と仁井田村との間の上に長柄と云所有家数千軒あり大津浪にて亡ひて後に近年平瀉の地繁昌すと云
- 一 下桜井村ハ宝曆十一巳年御郡奉行久方忠衛門村松の防風種相廻為蒔候よし今甚多し
- 一 磯原村の郷土野口市蔵近年蛭を大北川へ二升計放候よしの所追て多くなりたると云
- 一 上桜井村百姓八郎次といへるもの植物功者ニ付安永六酉年木綿樹為植候所に成長いたし間もなく枯候由申出ル
- 一 日棚村御立山の内石切場と云所より焼物土出る御留なり
- 一 上手綱村千堂坂といへるに銀山ありて宝曆四年堀初たるか間もなく止ム
- 一 下手綱村故城ありたつこ山と云後に松岡と云慶長七年より戸沢右京少進政盛領す元和八年出羽新庄へ移る同年御領分となる赤水作の常北

遺聞に慶長七年戸澤右京少進政盛領水尾三萬三石小川七千石代官小山八亮其時賊殺ふん故荒川三三年居候し十年徒移すと云

水尾此居 相見郡國糸郡鑑三妻一石三畝

一  
古本村の海中と大川名小サ名と云破り舟行難ぶる先年水本村の海士が名破りて一人余の大砲を以て道々の海人とも呼ぶを破りかたふま少少先必兼高木の砲を市振中合多徳の大高寺まで利發をなす候ありといふ云と云南木ありといふ名物のより一ある六年廿二のりそを破りたるは又大川小矣阿南徳所新元祖入何屋心か海へをうへ砲をぬぬと云ふ右のあまザ名破り入ふ出り半日申りて尺余の海といふと云ふは後砲をすふと云ふる候と云く徳井のりそを破りては多徳の徳仁寺利發なる者となる右の砲具ハ徳仁寺と納分んらり一語也といふ

遺聞に慶長七年戸沢右京少進政盛領松岡三万三千石小川七千

石 代官古山人蔵  
此二居ル 其時城狭小ナル故荒川三二年居住シ十年徒(徙)移スト

云々

松岡郡岡并郡鑑ニ委シ故ニ略ス

一 高戸村の海中ニ大ザクロ小ザクロと云磯あり舟行難所なり先年水木村

の海士サクロ磯にて一尺余の大砲取候て近郷の海人とも呼寄せ次第は

かたらず候得共必以来当所の砲取不申候様ニ申含手綱の大高寺にて

剃髪す其後あわひハ不取と云当所あわひハ名物のよし安永六年

其事を庄屋へ尋候に大同小異あり当組頭竜蔵祖父伊豆国より

海人をかゝへ砲を為取候事有右のあまザクロ磯江入不出事半日計

にして尺余のあわひを取上り此後砲を此所にて取間敷と云て

海中の事をかたらず手綱の能仁寺剃髪道心者となる右の砲貝

ハ能仁寺ニ納今にあるよし語れりと云

漢善傳延享四年影之上に大なる人あり堀初に成能せしむる竟  
延三年去止む

一 字は秋安長川市年々九月有り寛延二己年より堀百安長川  
八幡の宝物日の丸旗一流卯花威の澄太刀一振あり社兼大杉を  
日通りをせしむる二丈大尺寺也

一 秋山より先寺温泉あり白打を顔破る及ふ友古場あり堀居風はまよ  
いふ温瘡疝氣と云其後止む右新場の辺よぐらう山と云暫大よ  
入部行ハ焼くあり別石炭あり 水晶黒石英雲母右村命あり  
大沢板木山と云あり

一 友部村古堀あり山直氏の堀あり郡岡あり  
一 何陣時村古宿ありなまの河を阿と云と人あり何吹山といふ山  
山あり鷹鷲鶴飼養生を業と云ともの多し

澳普請延享四卯願之上江戸より七人下り堀初候所成就せずして寛  
延三年春止む

一 高萩安良川市年々九月なり寛延二巳年より始る安良川

八幡の宝物日の丸旗一流卯花緘の鎧太刀一振あり社前ニ大杉有

目通りにて九尺也二丈六尺五寸廻り也

一 秋山に先年温泉有白打にて頽破に及ふ故右場所を堀居（据）風呂に立

候所温瘡疔氣二宜其後止む右新場の辺にグンドウ岩とて暫火に

入置けハ燃るなり則石炭なり 水晶 黒石英 雲母右村より出る

大津板木山と云所なり

一 友部村古城あり山直氏の墟なり郡図にくわし〔図 省略〕

一 伊師町村愛宕あり故にいし町をあたごといふ人あり伊吹山といふ小キ

山あり鴈鶉飼殺生を業とするもの多し

一 俣野原村 陸奥河より近海邊は廣き砂ありはるなる移元徳是の  
 海は陸より一岩山の中程に之を置りて平野なるを其流もそむひ其か  
 ち移く思ふとをいつけつあるに如くより先移ある付也といひ其流  
 の間より四つ人の早しといふをありといひ村まゝをてまあり

一 川尻村 小具流より小川より砂利河より流るなりては橋といふ磯あり肉  
 羽のなる海あり元禄九年平原村に延在居といひあり南  
 村は海よりなるもの傳を伝へりてはむたき其流法元年  
 には秋とてなる海ありは南を居るなりは文あり

一 砂尻村 小具流より小川より海に流るなりては橋といふ磯あり肉  
 一 小具流村 小具流より小川より海に流るなりては橋といふ磯あり肉  
 一 小具流村 小具流より小川より海に流るなりては橋といふ磯あり肉  
 一 小具流村 小具流より小川より海に流るなりては橋といふ磯あり肉

一 田尻村 小具流より小川より海に流るなりては橋といふ磯あり肉

- 一 伊師浜村塩竈あり此辺浜辺に磨き砂あり御留なり鵜取島是ハ  
海に臨ミし岩山の中程二三疊敷計の平あるを菰にてかこひ其外  
江鵜へ足かわをつけつなき置おとりにす鵜来る時かこひの菰  
の間より四五尺の竿へとりもちをからみ夫ニてさすなり
- 一 川尻村小貝浜といふ所に色砂利あり御留なりてう嶋といふ磯あり肉たゞ  
醬キの名産あり元禄九子年平潟村松延道庵といふ物より当  
村津衛門と云ふものへ伝を御うけさせ其年よりたゞき製法す年  
々御献上二なる津右衛門ハ当庄屋藤左衛門祖父なり
- 一 砂沢村に細かなる砂出る小木津へ通る坂の中ほとなり御留なり
- 一 小木津村百姓介左衛門江木綿樹為御植小丈ケニ延候て不残枯候よし  
為蒔候は安永六酉年なり
- 一 田尻村ニ栄蔵小屋とて海中ニ小き島山あり上に小祠ありはだか嶋

とて傳ふ傳へたる中記は其の法帖のかとて

大田庵とありていふべきなりとてたゞ傳へたむのむの海の善き地

穀穴とて海邊の岩窟と傳き穴ありて未だ荒れざるまに國境

一宮田村神山嶺山を山とて度夜四十年予は村のやとて又志し

申の刻をうらまへ今より神山とてしんはたをいふとて

山をいふとて今一とてせよとて志すといふもたれとも能く考ふ

うくとて巡り村も多々れはとて是れなりとてせりし山頭をこれ

は日も中よりありとて考ふ考ふたれもたれとも能く考ふ

く室をいふとてあつとて山々の方位のともありぬ

巖より磁石ヲ以テ見ルニ如此因テ宮田村海濱マテ里數ヲハカリ大津早濠ノ方位ニアテ、  
里數ヲウモルニ甚道クシテアタラズ不審少ラス林ルニ高山ヨリ廣遠ノ所ヲ見望  
スレハ俗ニ云海繪トイヘル物ノ如ク面多ク狭ク見ルニヤト思ハル群國ニ平磯河原子  
川尾高戸大津ノ海岸ヨリ方位ト里程ヲ考テ撰ス

ぐミ嶋二ツ嶋あり道中記に西行法師の歌とて

大田尻ころもハなきかはだか嶋かせのひるひる浪の草まで

鮫穴とて海辺の岩窟ニ深き穴あり其所景地なり末に図あり〔図 省略〕

一 宮田村神嶺<sup>カミミ</sup>山高山なり寛政四子年予此村のやとりに着候頃

申の刻はかりなり今より登山すへしといへは庄屋次三郎今より登

山ハおそかるへしあした登れと云てしきりにいなミけれとも朝ハ露ふ

かくことに巡れる村々も多けれハとは是非にとて登れり山頂に至れ

は日も西にあかねさし暮靄たなひきける所もありてくわし

く写すへくあらねハ只山々の方位のミしるしぬ

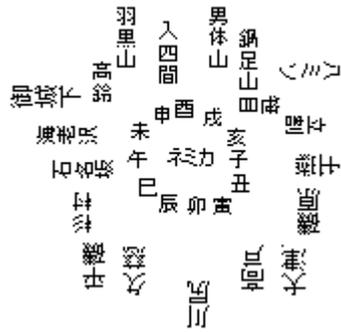
嶺ヨリ磁石ヲ以テ見ルニ如此因テ宮田村海浜マテ里数ヲハカリ大津平磯ノ方位ニア

里数ヲツモルニ甚近クシテアタラズ不審少カラス按ルニ高山ヨリ広遠ノ所ヲ眺望

スレハ俗ニ云浮絵トイヘル物ノ如ク白クヲ狭ク見ル事ニヤト思ハル郡図ニ平磯河原子

川尻高戸大津ノ海岸ヨリ方位ト里程ヲ考テ撰ス





夫より山を下り一の鳥居を出る時庄屋溜息つきて

さてさて御用と云ハありかたきものといへる故いか

なる事にやと問ふに此山へ七ツ過なと登る

ものなし権現へ詣ふてるには前の日より湯あみ

切火して登る事になんあるにかく日暮におよひて

事なく下山する事のありかたさよといへり夫をも

知らて強て登れる事村長の心のうちおしはかられぬ山道けわしく

登れる時よりもくたりにハいと、なやむて大雄院江至れば火ともしころ

過となりける庄屋の組頭にいへるに暮ぬ前に灯持て大雄院までむか

いに出よとい、置たれは来りぬらんとく聞て参れといふに組頭いちはやはや

立戻り少し先に火を乞ふててうちんともし立出ぬと寺にていへるよし

なれとも此山道ハひとすし故迷ふへくもあらずいか、しつらんとミなミな



おとろきけるさまにて其ものを呼めくれとも更にこたへもなし扱ハ神かくしに逢ふたるなるべしとしきりにさかしもとむれとも見へされは組頭と其外の人々をのこしたつねよとて予ハ庄屋をあなひにて宿へかへらんと大雄院の門前大杉たちこすミたる所八町ほと行過ぬ其所に人家二三軒あり軒下に提灯をともし置けり庄屋立寄見れハむかいに出たるおのこ縁に足なかなかとふミ出し小唄うたふてやすミ居たり庄屋何とて爰ニハ居たりといへハ日ぐれたるゆへ山へものほりかたく此所に待居たりといふ夫より又たつねにのこしたるものを呼なとして戌の刻はかりにやとりにつきぬ明けの日諏訪村に至りきのふハかくかくの事ありて大わらひしぬと語りけれり庄屋徳衛門いへるハ次三郎の心遣ひいたしたる事なミ体の事にはあらさるべし此辺りにて中々夕方登山などすべきものなし三四年以前にかみね山へむらの者薪



取につねに人の至らぬ山奥に至る薪を伐らんとて斧をふり上げしに  
峯動かさる故ふりかへり見れハ大なる山伏其斧を握り居たり斧  
をはなし驚きおそれて打伏しけれハ斧の音ひゝきて打伏<sup>フシ</sup>たる

頭の前<sup>ヱ</sup>投落しぬる故其斧をとり跡をも見す我家へ戻り斧

を見るに斧刃かべ

斧の柄をさす  
穴の所をかべといふ由

の所へ丸くなつて付ぬ其斧を徳右衛門

したしく見たるに其形人力ハさらなり火にかけ槌をもて打たるとて  
もなかなか曲るへくもあらず思わると云かくの如き事たまたまあり  
てミなミな天狗のわさなりとておそるゝ事なりといふ予か其時召  
連し僕ハ入四間村の生れにて嘉介といへり年の頃五十にあまれる  
か年若き時四人にて入四間山へ木を伐りにいたり昼休ミせんとて足  
なけ出し煙草吸ふて咄居たるにむかふなる大杉風もなきに倒<sup>タオレ</sup>  
れかゝれハ三人のものあわてふためき逃出し宿へかへりぬ嘉介ハ風も



なきに倒るゝ事もあるましけれハ倒るゝ如く見ゆるのミなるへしと思ひ居たるやかて倒れかゝると見へしか正氣を失ひぬ先<sup>ニ</sup>かへりし三人のもの嘉介の帰らぬを心もとなし思ひ尋ね来たるに杉の木ハ倒れす嘉介ハもと

居し所に絶入居たりしをさまさまいたわり正氣付たる事ありとかたりき

此前年 上公の御筆を以て育子の弊風あらたむへきの命あり

て予六月の半に農事のひまある時村々めぐりて村毎に百姓

妻子迄をものこりなくあつめて教諭せし時介川村に至るに村長

のいへるハ兵四郎といへるものきのふ馬を牽て朝草刈に山へ至りしに

帰らざる故人々打つとゐい山を尋しに馬ハつなき置て兵四郎ハ見へす故に

村内のものけふもたつねに出たれば打寄もの少しといへり其夜介川村に至

り兵四郎ハいかゞそと尋しに四日過ぎてもとの所へ帰り居たるを見当りて

ツれかへり四日の間いかなる所に行たりと問しに何も覚へたる事なしとて



只うつとりとしたるさまなりけるか程なく常の如くなりけるといへり怪

カハ語るましき事なれとも山鬼などのかゝる事をなしぬるかいふ

かし赤沢と云所ニ銅山あり願有て度々堀初しか悪水なかれて

田畑損することて止む鍾乳石出る介川堺ヤツコフシと云に有宿

より二十七八丁あり又大雄院活眼泉よりも出る天童山大雄院客

殿鴨居の上を一間畳の表にてはり置其外ハ壁」なり皆壁にする

時ハ一夜のうちに天狗来りて破るといふ 義公の命にて当所へ

杉の名産なり友部東泉寺ハ大木の松山なれば東泉寺へ杉を

おくり当寺ハ東泉寺の松にて造立 仰付られたるよし当寺に十景

あり 大白峯 観海亭 獅子峯 猿戒壇 中峯

七賢洞 鉢孟峯 活眼泉 虎溪 三笑橋

清溪 清関橋 屏峯 杉径

唐棗の見臺 義公 大樹の所不詳を以て御講釈を遊小節の西京  
を以て寺にお寄附ありしと云ふは信持の弟孫共と云ふ寛政四年信  
持の孫  
うら白年と云ふ傍り月と細むまむ介川今影 証訪 大久保金次  
漸の志砥るゆ

一 介川村高鈴山松原野井の字山也昆望の岡あり記を此山并散野  
の内オク朱有し堀よりなる金山堀跡も有

一 會瀬村お伊勢ヶ崎伊茶屋場ありハツサキツキ活 鶉鳴 セ夕

濱磯河 元禄十五日十一寅年當溪く 義公生海濱をる致邊  
今キニギギコとて有る此村お伊勢村と云ふと云元禄十一と三月會瀬村に  
改方より伊出是は海面を南やの陵のお合ありありとすりたるは此  
の舟ありの澳ありなり考後ありなり然れどもし白砂と云ふ河あり  
一 証訪村水定河寺なる一里中高山の麓に有活水源あり洞中なる

唐桑の見台 義公 大樹の御所望にて御講釈被遊候節の御品

を此寺に御寄附ありしを先々僧持の節紛失すと云  
寛政四年往  
持の話

うら白年々御飾御用ニ納む 宮田 介川 会瀬 諏訪 大久保 金沢  
瀬谷辺砥石出る

一 介川村高鈴山松岡郡中の高山也眺望の図末に記す〔図 省略〕此山并散野  
の内オク朱有之堀候事有金山堀跡も有

一 会瀬村に伊勢ヶ崎御茶屋場あり ハツサキ ツキ嶋 鶉嶋 七夕  
浜磯あり 元禄十丑同十一寅年当浜へ 義公生海鼠を為御放被遊

一 今キンコギンコとて有古ハ此村相賀村と云しを元禄十一寅三月会瀬村と  
可改旨被仰出是ハ海面ニ南北より波の打合候所あるによりてなり少し  
の舟懸りの澳あり度々普請あれとも成就しかたし白玉子石あり  
諏訪村ニ水穴あり本郷より一里計高山の麓に有活水洞なり洞中寒水石

の如き云々あり。潤ニニもあつて少しありて又低き不有くとも  
入事に又度きありと云事の云玉海守宛するの阿へ言はしり古万年  
太夫は元々入くふ出と云傳記も後訪ゆ神三万年云々と云ふもの  
画像あり自画の由同人史家の本像あり老人の面をも白髪折鳥帽  
子袴衣のやうなるものと云ふ事あり 義公古の像は再興古像の辭  
日又させら逐は裏老あり

常州多賀郡諏訪神祠有萬年太夫藤原高利夫婦像  
年久朽弊令新命工改造二像藏故像其體中以無將  
未

元禄三年歲次庚午十月吉日 水戸侯源光圀識

右方自右更しと云々の出而不詳此の事を経任者して後夫如き  
ふの宛ふ今々の東志也と云

の如き石窟なり闊二三間もあるべし少し行て又低き所有くるりて  
入れハ又広き所有と云予ハ不至深サ究る事あたわすといふ古万年  
太夫此穴へ入て不出と云伝鎮守諏訪明神ニ万年太夫と云ふものゝ  
画像あり自画の由同人夫婦の木像あり老人の面にて白髪折烏帽  
子狩衣のやうなるものを着たり 義公右の像御再興古像ハ体  
江御入させ被遊御裏書あり

常州多珂郡諏訪神祠有万年太夫藤原高利夫婦像

年久朽弊今新命工改造二像蔵故像其体中以垂将来

元禄三年歳次庚午十月吉日 水戸侯源光罔識

右万年太夫と云もの出所不詳此所ニ年を経住居して後夫婦共に

水穴に入て行衛知れすと云

義公より出雲附のみく

侍懐釵一振 握々三ツ 竜刀石一ツ

義公より出雲附のみく

八咫宝鏡一面

元禄年中才守納裏ニ名有

水戸藩下士散位従五位上前左京大進狗宿称近章

宝釵一振 松田孫太夫真持献

善賢藏 屏風石といふ石ありてよく光り南なる

一大又徳村より不英出る善提と云わるう橙年 内膳又刺之納み今村

とせし有雲とて納む也 風光あり山の平あり其の傍へ玉置

風出る極あり亦平廣きあり又隙子とてけてさきは一版平なる

ありて先は深き穴を井と云いとも井の如く水とて吐く投入

義公より御寄付の品々

御懷劍一腰 猩々ユヒ一ツ 竜刀石一ツ

義公より被仰付奉納之由

八咫宝鏡一面

元禄年中奉納裏<sub>ニ</sub>名有

水戸府下士散位従五位上前右京大進伯宿称近章

宝劍一振 松田孫太夫奥将猷ル

普賢嶽 屏風石といへる石壁あり水穴より南なり

一 大久保村より石英出る菩提と云所なり橙年御飾御用<sub>ニ</sub>納<sub>ム</sub>今ハ村

二 無之故買上<sub>ニ</sub>て納候由 風穴あり山の中段なり穴の傍へ至れハ

風出る様なり穴中広き所有又階子をかけて上れは一段平なる

所あり其先に深き穴有井戸と云いかにも井の如し小石を以て投入

一 水原村 水原の者として御くまの事しきまの山に此下海濱山なるものついで  
 されたる元のめくもとをの流しとせなる一 ありはれはるる事なり  
 一 河原子村 海濱より藤原の御ありはれはるる事なり 藤原の御ありはれはるる事なり  
 西山公江たより 岸なりし海濱に 為多敷の邊海濱に 才サカガはれ  
 二の御 是の御ありし米徳大徳 是の御ありし米徳大徳

一 金海村金山堀海あり

一 水原村 吳皇船着る海あり 是をキサといひ白クリ石出ん 金砂大赤丸  
 の附の田を朱場と海の中大塚サクといひの塚あり元禄十五年 義赤丸  
 是の塚を遊遊ありしなり 泉明神を泉川といひ 此の塚の石を洗  
 へたるおちの湧出の傍に石を赤ありとてけしむる石をけしむる  
 神傳は中よりいさ出むしといひの傳あり 義公の命は天の速玉  
 姫の命を死してなる事なる事なりとて 傳はるる事なりとて

るに四方へあたる音して漸々音聞へす思ふに此下諏訪山などのつゝき

なれハ水穴の如く下を水の流るにてなるへし故に風生すると見ゆ

一 河原子村海浜に御茶屋場あり元禄十三辰二月トコブシ四十盃

西山公江戸より御呼下シ海中へ為御放被遊海浜 オサガメ嶋也

ヤクシトウ共云津明神○ 不分

二ツ明神 嶋也明神ハナシ 米嶋 大嶋 立<sup>テ</sup>磯と云有り

一 金沢村<sup>ニ</sup>金山堀跡あり

一 水木村異国船番所あり遠ナキサといふ所ニ白クリ石出ル金砂大祭礼

の時の田楽場有海中<sup>ニ</sup>大磯サクといふ磯有元禄十丑年 義公<sup>セキラ</sup>赤螺

を為御放被遊候よし今なし泉明神有泉川といへる明神の御手洗

也常々水中水湧出ツ傍にて手を打声をかければ甚ワき出る明神の

神体ハ此中よりワき出玉ひしといひ伝ふ 義公の命に天の速玉<sup>ハヤタマ</sup>

姫の命を配して祭れるならんと被 仰と云伝明神より少し上りて

ふかの原といふ玉あり、山邊に日影の如く、漢名松蘿川尻村ニテモ見ケタリ 義公より好領のよりトモ達摩の畫物語、画ハ此寺と申傳へるより、誤也

如雲拜贊□

四 断臂定宛全

三 早知灯是大 達摩面左へ向

二 當下使心安

一 求心無處負

正原伯時先生ニ云ラフテ又如雲ノ「洞」と云々如雲何人未詳ト云々

外西紋白中四持人亦持銀品者、亦我權者也

一 又慈村ニ大磯トケ磯あり中の洞と云々、砂浜あり、法智大癩免明神石山のよき祠あり

一 田尻村ニ度志觀音あり、弘法大師岩面へ彫付く由

ミかの原といふ所あり此辺に日影のかつら有 漢名松羅川尻村ニテモ  
見かケタリ 此村

庄屋佐藤善次衛門祖父善右衛門 義公より拝領のよしニて達  
磨の懸物あり画ハ御筆と申伝へたるよし 讚に

如雲拝贊□

四 断臂定完全

三 早知灯是大 達摩面左へ向

二 当下便心安 立原伯時先生ニ点ヲツケ又如雲ノ事ヲ問ヒシニ

一 求心無処モトムル 如雲何人未詳ト云々

外御紋付中皿十人前拝領品有之所致焼失候由

一 久慈村ニ大磯トケ磯あり中の洞と云所に砂鉄あり鎮守大甕明神石山  
の上に祠あり

一 田尻村ニ度志観音あり弘法太師岩屋へ彫付候由

一 手残村の磯の名  
海老磯 海老 尻懸磯 鵜磯 鯨磯

仲間磯 三ッ磯 烏帽子磯 高磯 千疊磯 今大石磯ト云

清淨壇 大棚 胎内石 丁子石 畜生浦 磯奇以下

赤坂浦 銅磯 海中 高楯磯 磯 貝磯 ぶし弁磯 獅子前

大縄磯 備へん 磯 海 磯 有 磯 鬼隠石 容神石 鏡磯

今不知磯の石 大歩磯 との磯 大縄磯 三ッ磯 沖ぐり

尋瀬 海舟

一 西河内中村辺にいつぐと云本あり御海を移すの勢と云用と云あり

一 小野矢指村辺の海は磯の細と云海原あり後の河をきりたれりひく妙

たつと云

一 石界内名村紐匠才常あり石持中重盛常力藤原秀道が寛永三丙寅

の年左邊成あり田村石理中を果玉持 捨地供二舟上常

一 平磯村の磯の名  
海老磯 磯崎 二有  
尻懸磯  
鶉ノ磯  
鯨磯 今大ビラ磯

仲間磯 三ツ磯  
鳥帽子磯  
高磯  
千畳磯 ト云い  
是ヨリ以下

清浄壇 大棚  
胎内石  
塚アリ  
丁子石  
畜生浦  
磯前

赤坂浦 銅磯 海中  
ナン所高楯磯  
貝磯  
しぢみ磯  
獅子ノ前

大縄磯 まんぐわ 大小あり  
海くら 海中ニ有  
鬼隠石  
客神石  
鏡磯

今不知磯の名 火打磯  
との磯  
火縄磯  
三ツ磯  
沖くら

尋瀬 海中ニ有

一 西河内中村辺にいへくと云木あり紙漉にねりの替りに用る木なり カウト有

一 小野矢指村辺の海に経の紐と云海藻あり腹のあしきなどに用ひて妙

なりと云

一 石神内宿村組頭十郎衛門所持小野崎帯刀藤原秀道より寛永三丙寅

の年官途状あり内村百姓五郎兵衛所持の検地帳二冊上書

文禄三年六月十九日

常陸國那賀郡

石神村法驗地帳

石田治少輔奉行

山田玄十郎

未考の山田若十郎と云ふ

終に本名若十郎と云ふは皆中絶既凡そ故南代に未考此は二海に  
石神少曾孫能くは捨地有るも吾等の上依渡造中若十郎方へ之を以  
て切に未考と爲者也

寛永十八年八月と云ふ

新田村女身ノ寛永六年昭通人の友達快石村中快村爲経と云ふ若十郎  
三ノ里氏休在ると云ふは利申の友達快石村の姓生並つて是  
書に於て三ノ里と云ふは吾等村の姓生並つて是村内外若村の姓生並つて是  
石神村也(平乃三ノ里村在り是等村法一更つて是村法未考山村也)

常陸国那賀郡 石神村御檢地帳

石田治部少将輔奉行

山田甚十郎

末書ニハ山田菅十

あり

終の所ニ右石神落城の後暫中絶致候其後当御代ニ相成候所此ニ冊ハ

石神小野崎領分の檢地故上へも無御取上依渡辺小七郎方へ御願被成候依  
大切ニ所持可致者也

寛永十八巳八月とあり

額田村介衛門寛永六年昭道テアルミチよりの官途状所持小沢村百姓与茂吉慶長十

三年黒沢佐左衛門殿と有書判計の官途状所持当村百姓本衛門古キ覚

書所持前ニ写置其外龜作村百姓庄衛門より石神内宿村百姓與吉内田村

百姓市衛門平衛門三方村左一兵衛高野村弥一衛門ニツ貫村弥兵衛森山村三郎

老傳入四宮村右馬允備村可蛇滑川氏名志中同村多燈卷平大ニ保村才允  
老乃大匠打臨平大ニ保村宗帝不臨村初在老乃中同村多偏下指上在  
文老五乃之官也

一 瑞龍村旗樞寺の樞八幡太郎義家勇抄の凱旋の日に此地に休ま  
し旗竿を立たせし志事なるを根付と云ふ

一 里洗村の神之孫八文字堂村史に成り老城志守也及又在老ノ邊<sup>道</sup>  
古國十五年云々の事云ふ切石に依り申あり巨多乳也出有解

一 里川の源里川新田の古<sup>古</sup>河<sup>河</sup>の源の古<sup>古</sup>河<sup>河</sup>なる

雨夜の御三河飲田名下と 義公様不安後豆祝の<sup>豆</sup>竹付の撰中ら撰<sup>撰</sup>の<sup>撰</sup>名<sup>名</sup>下<sup>下</sup>  
元三十五才下  
相松 那珂湊 青柳屋 笠間山 稲田姫社 西本湖浦 十八<sup>イセ</sup>坂 那珂川  
岩谷観音堂工村 大洗磯神社 全砂山 武弓山 生弓山 白羽神社 玉屋滝  
袋田滝 若葉牧子沼浦 波佐加海 講野橋 水本候清水 緑ヶ園 大森  
飯沼 薩郡社 波池蓮折堤 古内里 埴井小川 里川 里積山<sup>里積山</sup>

岩松社 静社

一 兵衛入四間村右馬允幡村百姓滑川氏名忘小目村百姓藤十大久保村十左衛門大沼村孫平大久保村宗節本孫村利左衛門小目村春伯所持の古文書有前ニ写置

一 瑞龍村旗桜寺の桜ハ八幡太郎義家奥州より凱旋の日此地江休息し旗竿を立置き忘れたるか根付たると云伝ふ

一 足洗村の明神元禄八亥年当村曳ニ成ル岩城家中加藤又左衛門造營す同十五年又左衛門より道筋切り石ニ仕度申来候由ニて願出相済

一 里川ハ源里川新田より出る此川鮎の名産なり

雨夜の伽ニ御領内名所を 義公様より安藤主税江被仰付御撰と被指置候名所の 覚三十二ヶ所

村松 那珂湊 青柳渡 笠間山 稲田姫社 正木湖(浦) イシナサカ 那珂川

岩谷観音塩子村 大洗磯神社 金砂山 武弓山 真弓山 白羽神社 玉簾滝寺

袋田滝 若栗牧 千沼浦 波佐加ノ海 旗野桜 水木浜清水 緑ヶ岡 大森

飯沼 薩都社 千波池蓮柳堤 古内里 増井小川 里川 黒根山 何レヲ云ヤラン

岩船社 静社



此三十二ヶ所の内に十八道坂と云有り何れを云やらんとあなたこなた穿鑿して  
けるに石名坂を 西山公被仰<sub>ニ</sub>石名坂の文字十八道坂と書直候様<sub>ニ</sub>と御意<sub>ニ</sub>て  
則其節太田蓮華寺日乘十八道坂の詠歌指上候由慥成方<sub>ニ</sub>書付有之写之

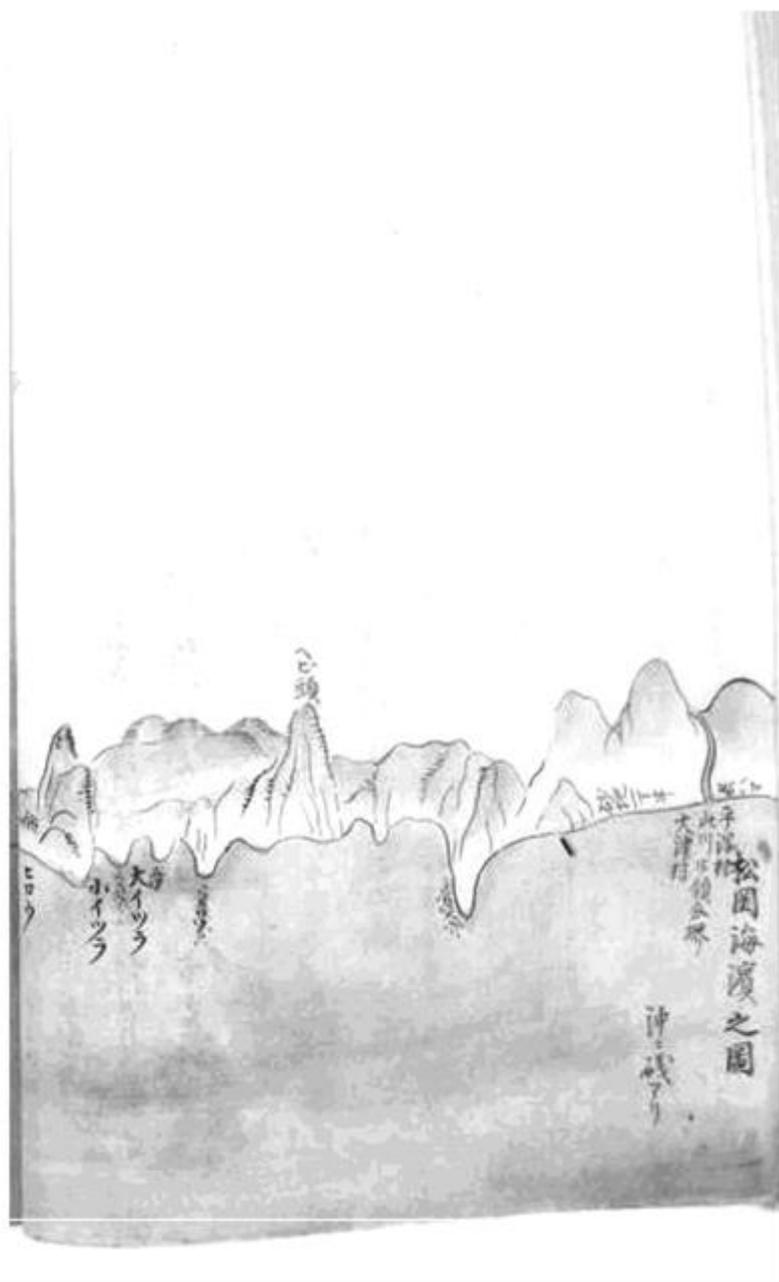
十八道坂雪

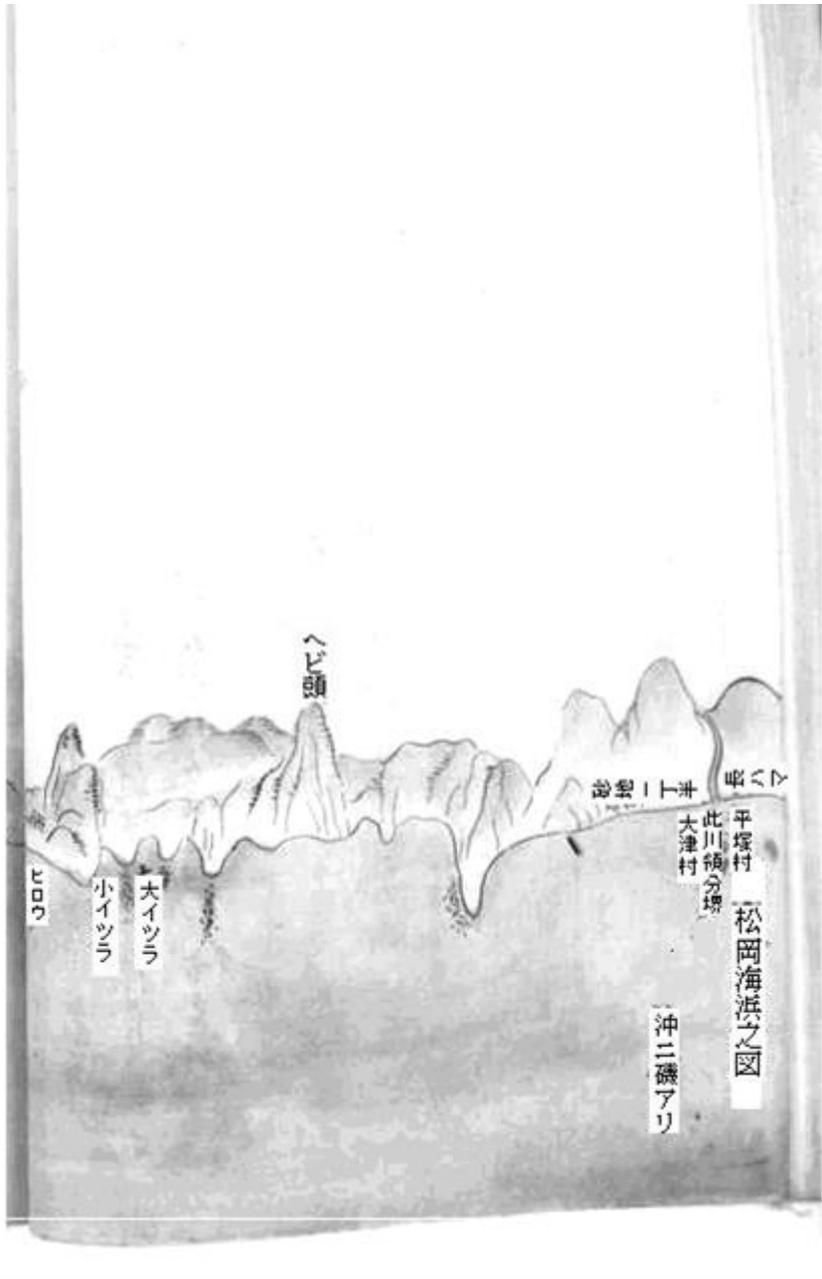
蓮華寺日乘

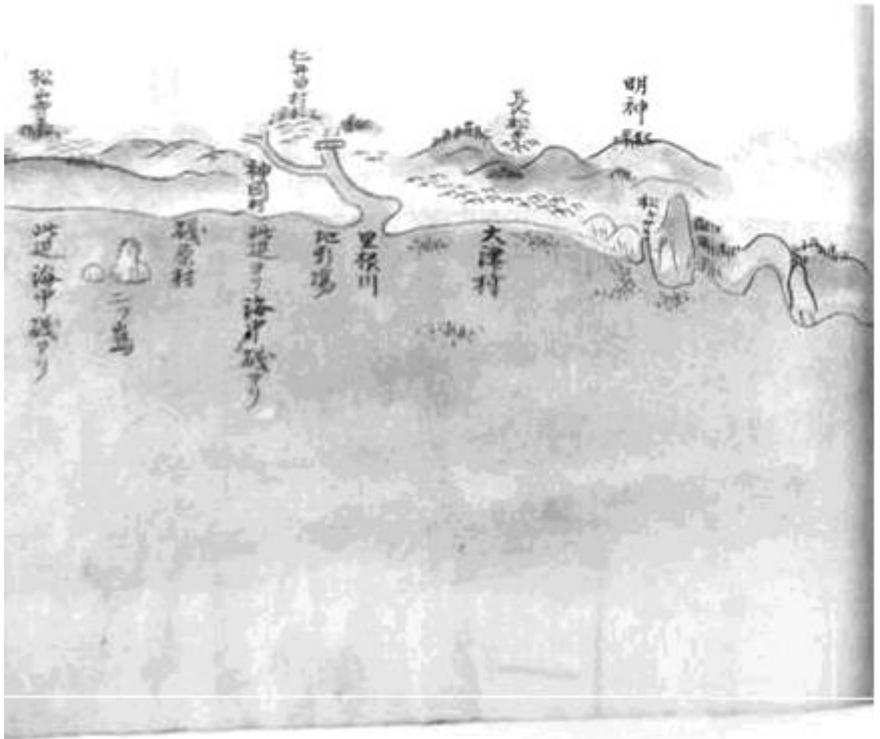
ふる雪の夕はさひし十八道坂はるかに沢のおとはかりして

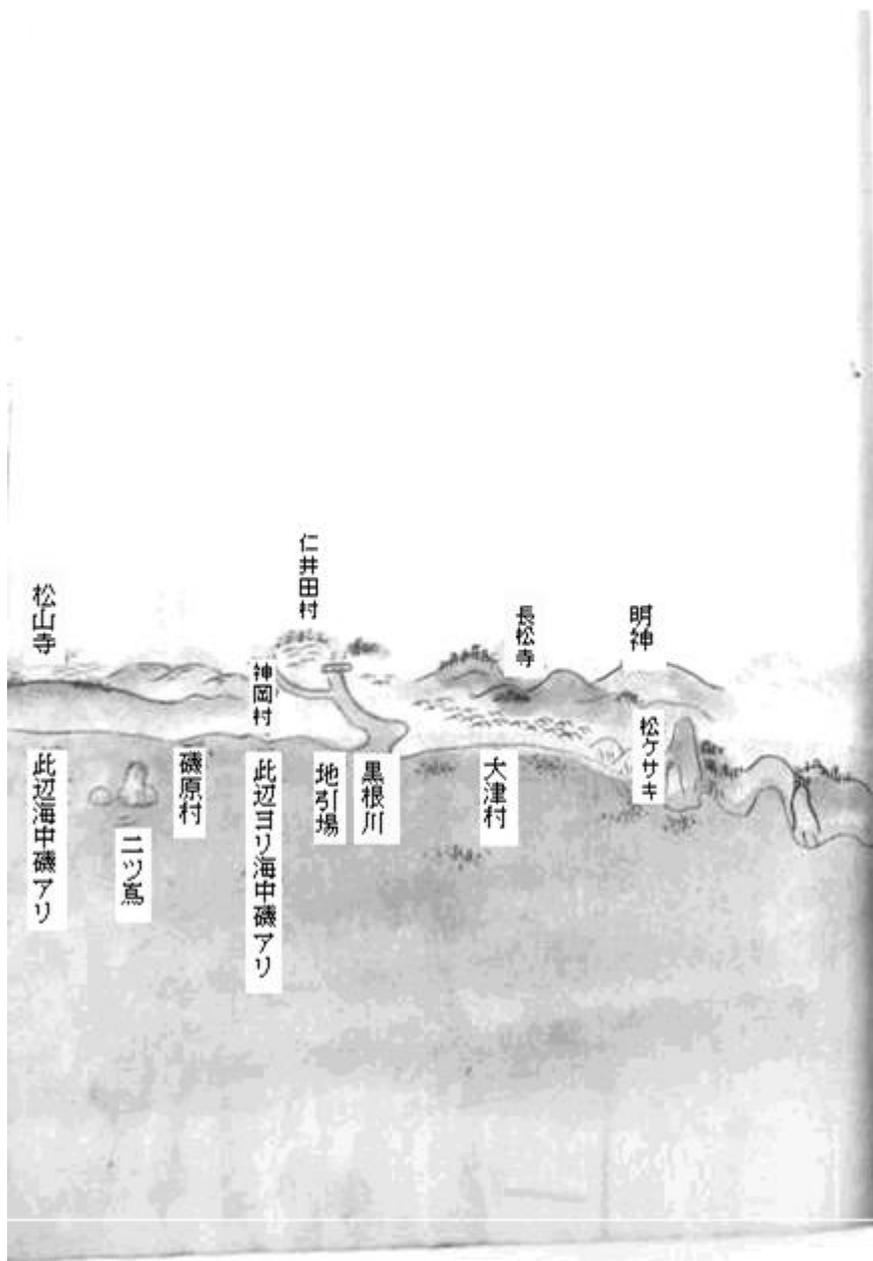
是は癸酉十月五日田中内村へ 西山大君御成詩歌の御会の時 御前

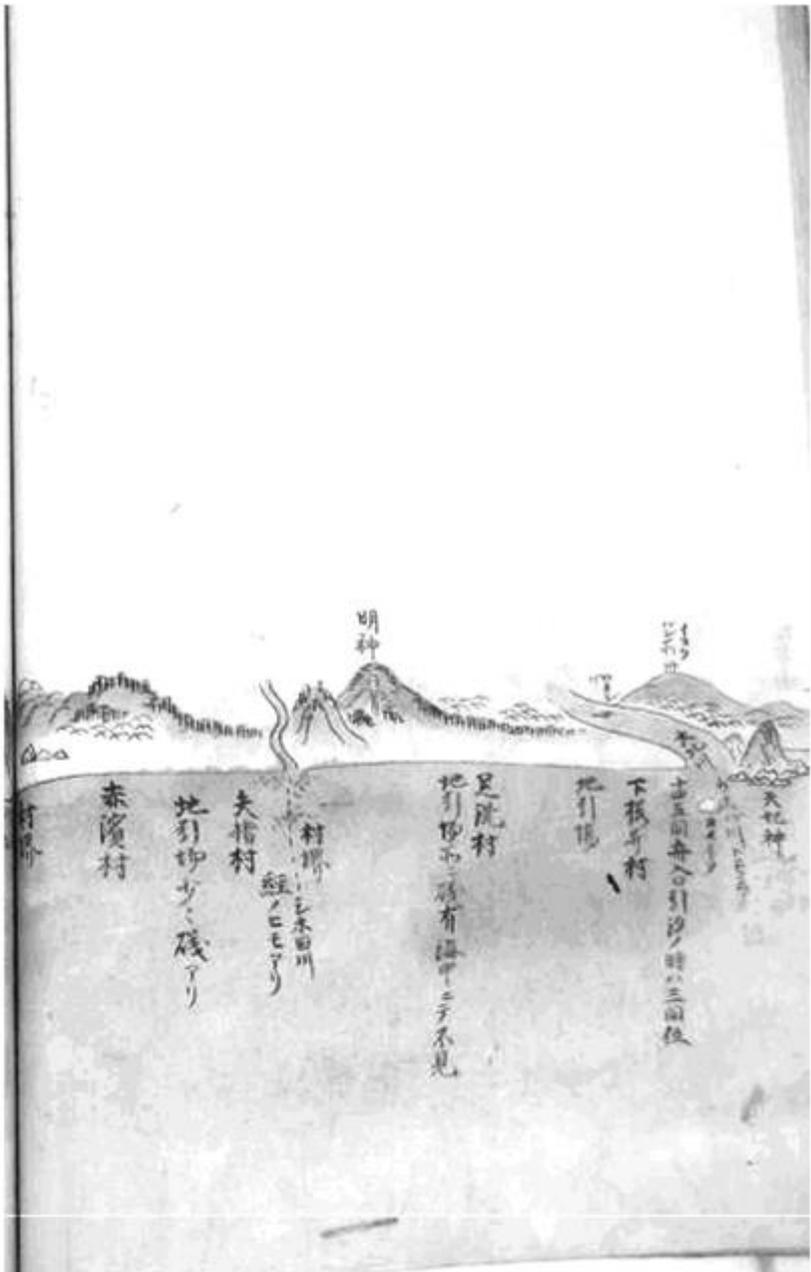
日乗読て指上候由也 此処に御会<sub>ニ</sub>罷出候族姓名アリ略す

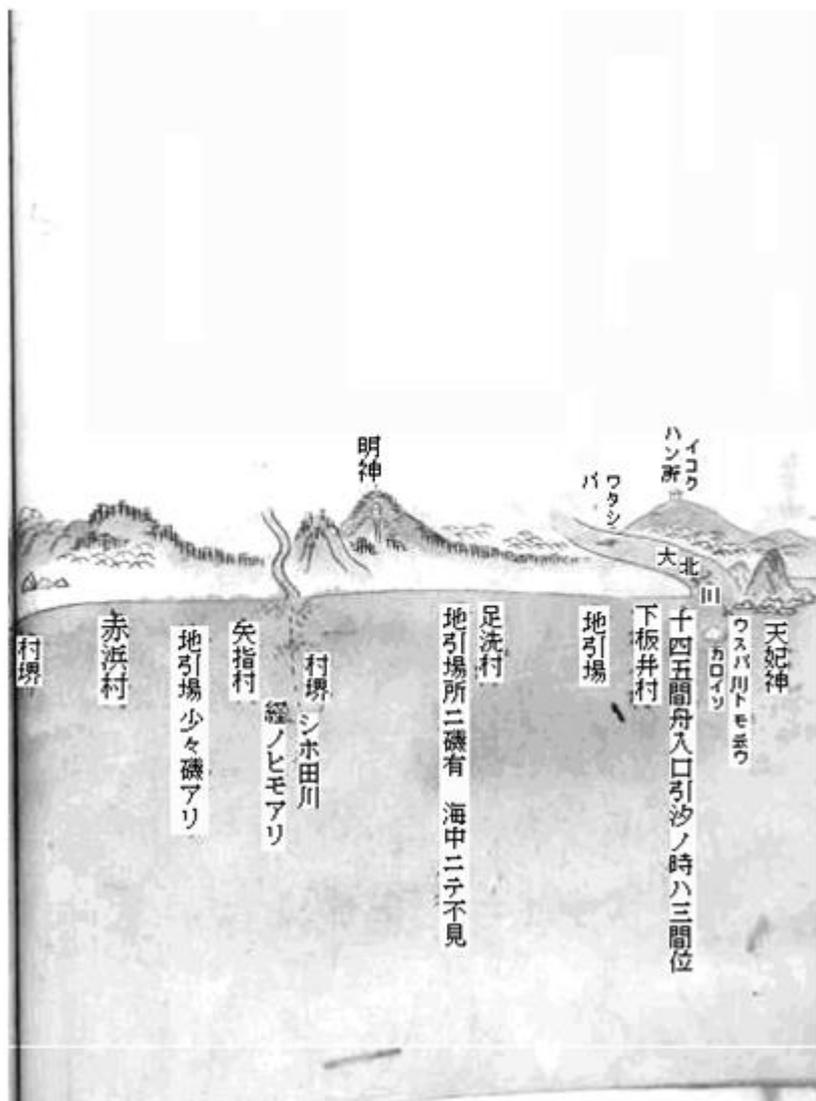












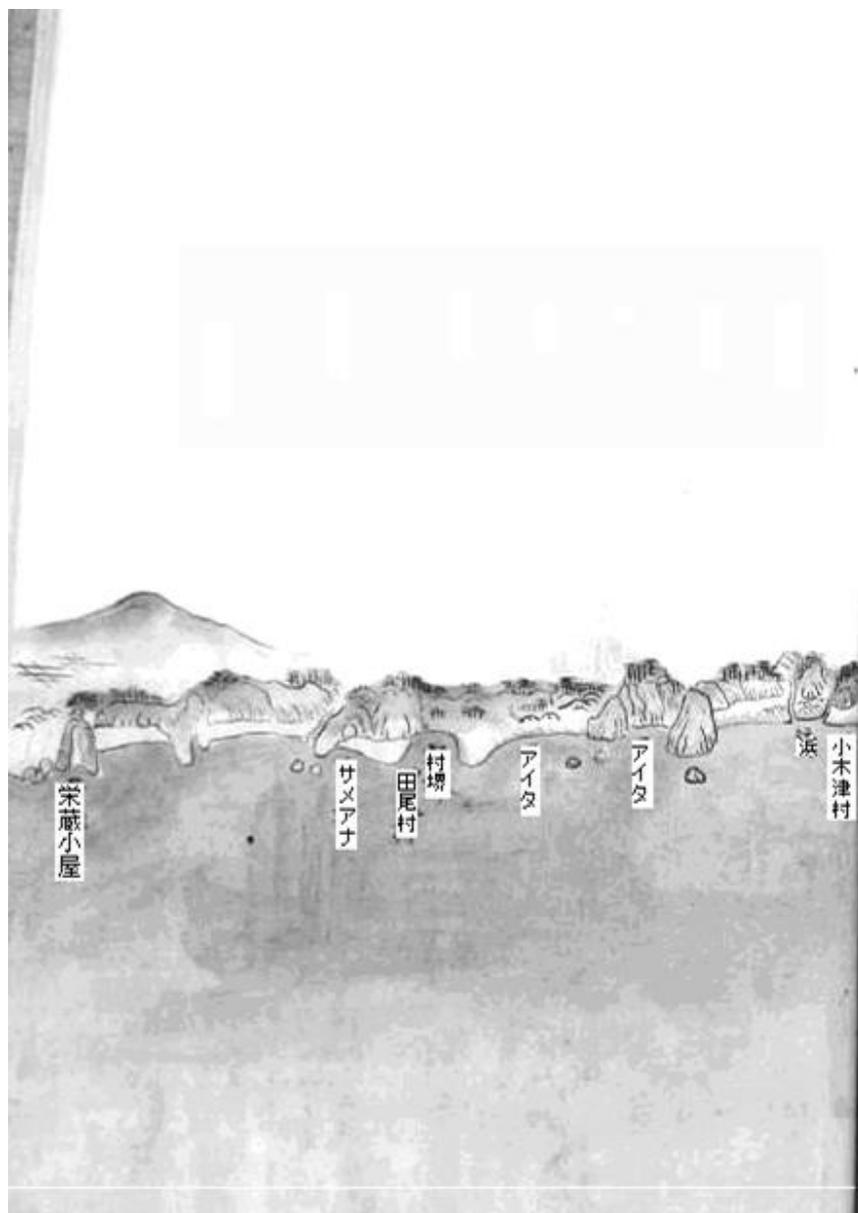


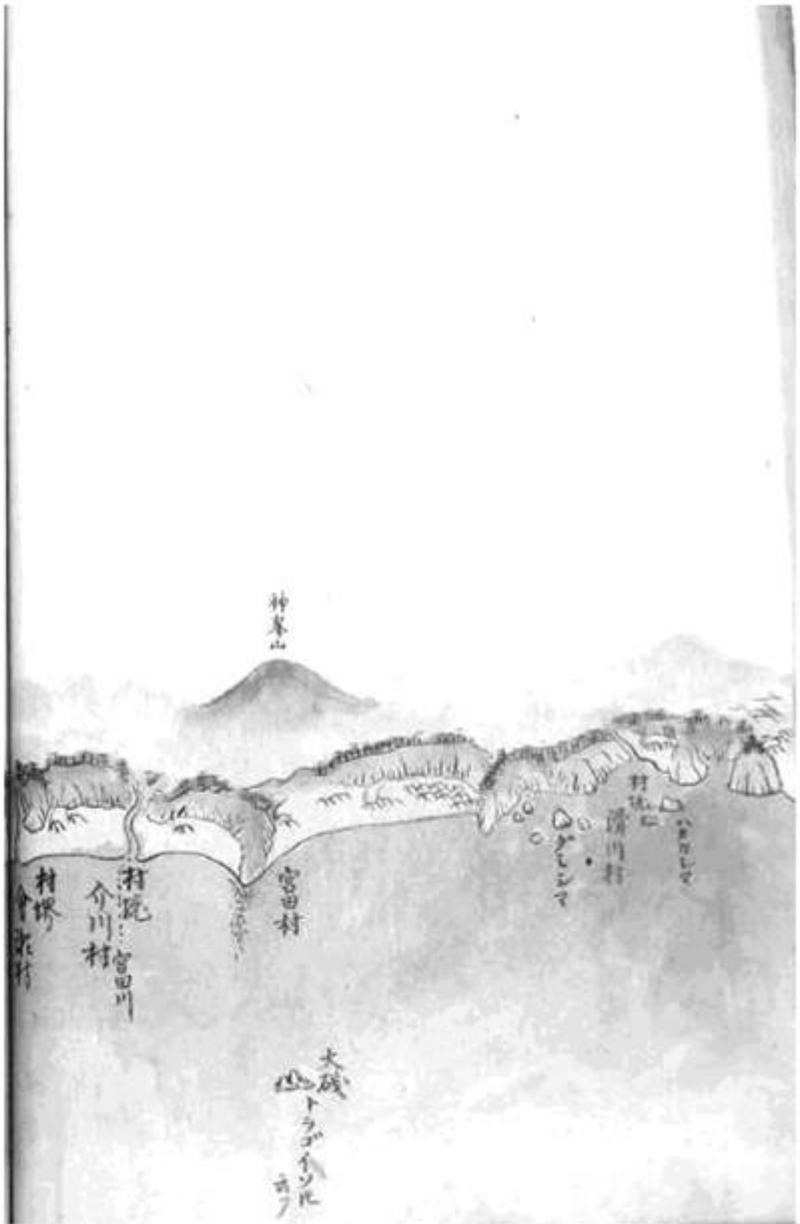




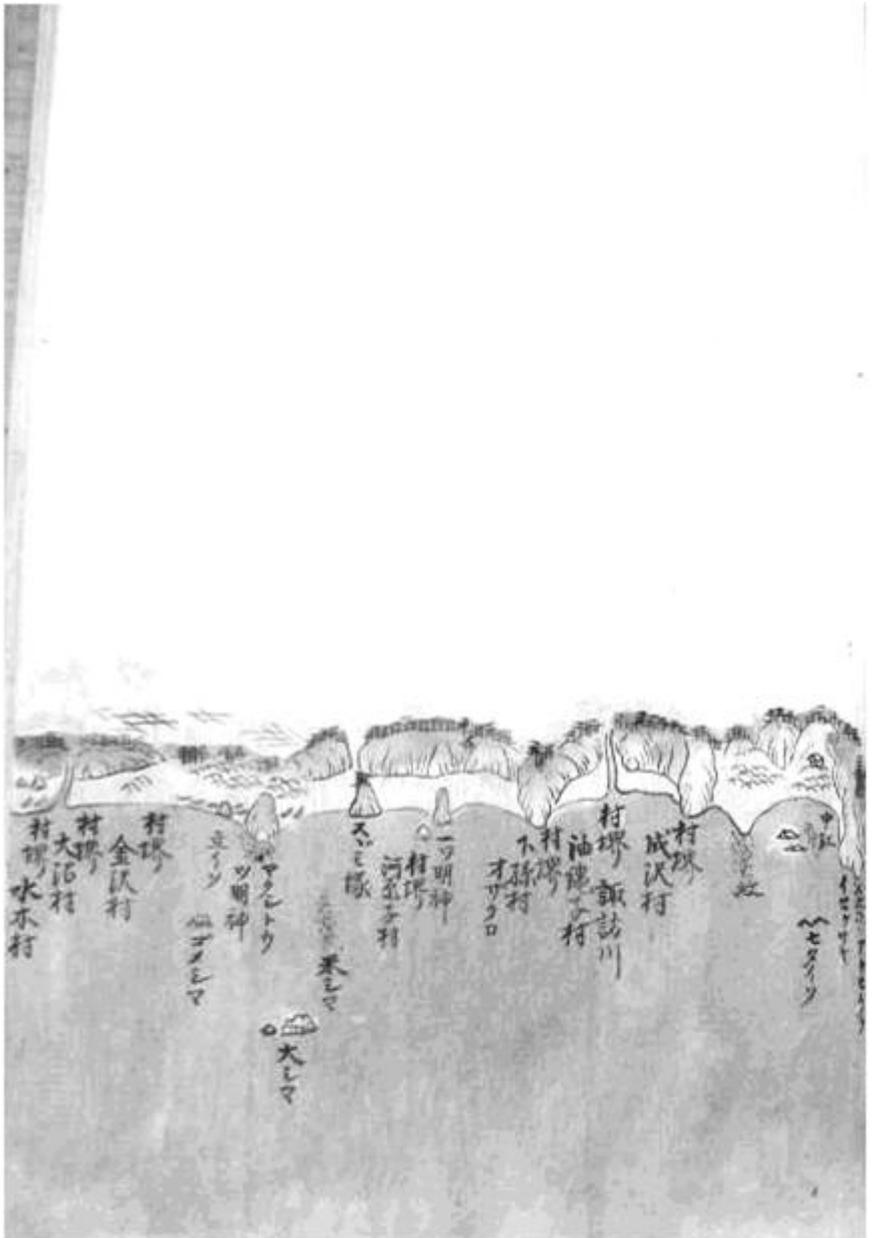


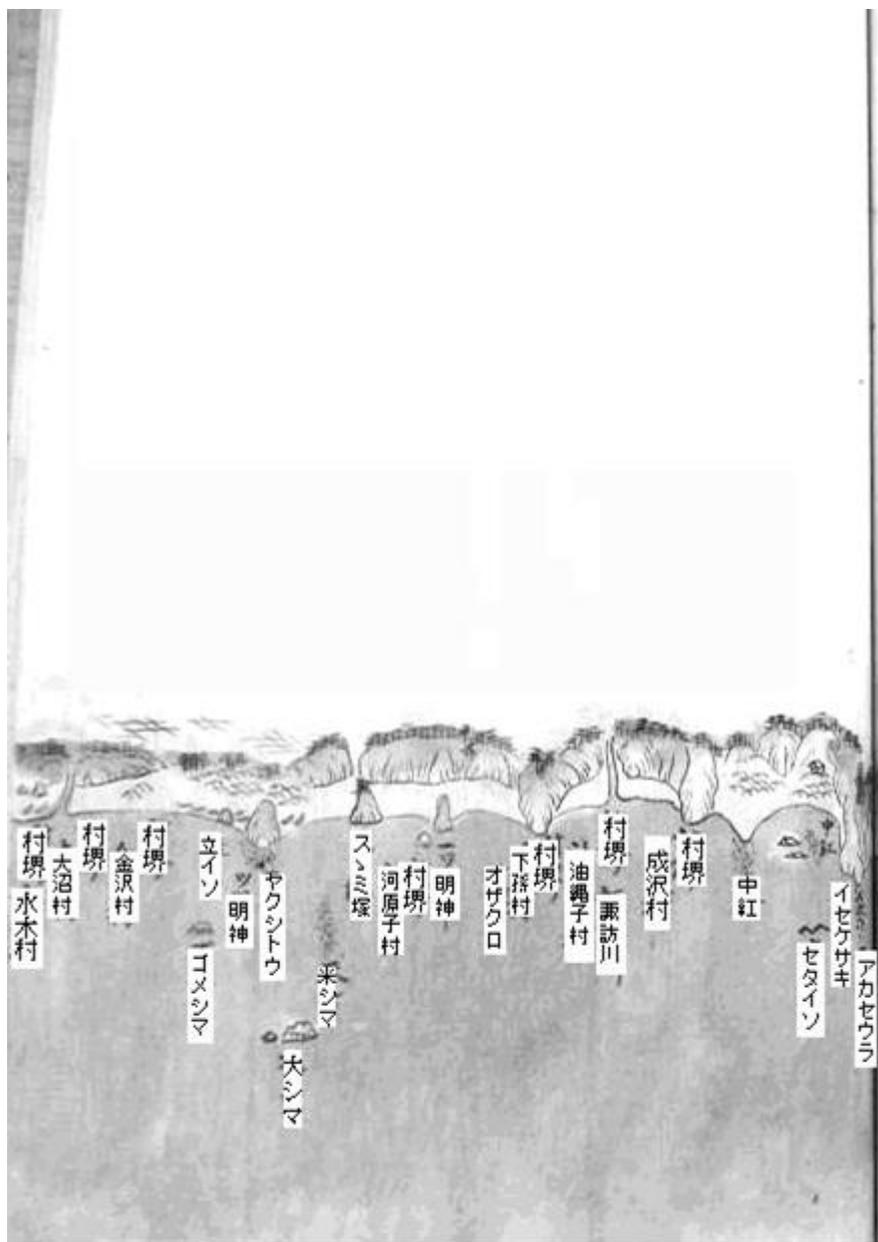






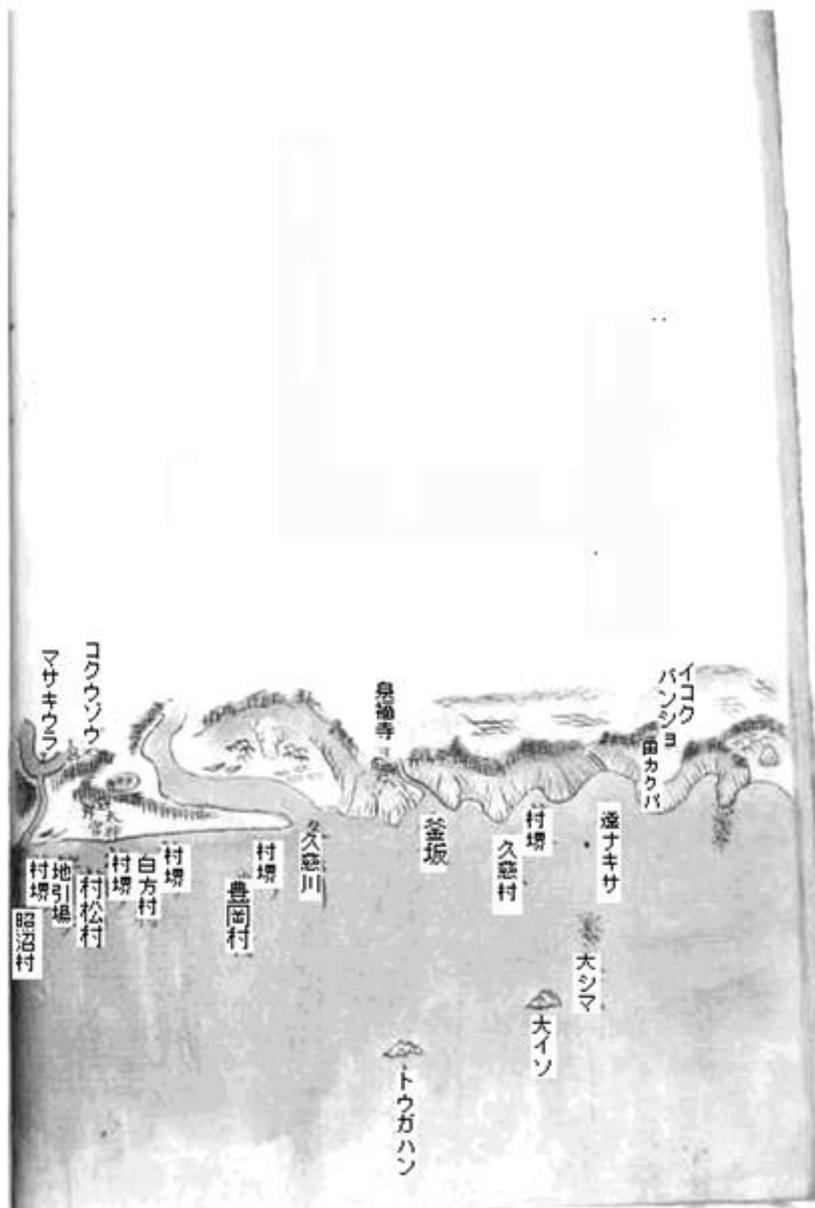








里老傳常陸地理誌 (みちくさ集)



里老傳常陸地理誌 (みちくさ集)







右ノ図磯石等書記スヘキ事ナキ所ハチゞメテ図ス里数ハ郡図ニヨリ  
テ見ルヘシ海岸ノ出沒川口ノ大小精細ナラス只大概ヲ図セルナリ磯  
石ノ名モ亦土人ノ云ナラハセルマヽニ記ス  
南郡寛政六甲寅年ヨリ同九丁巳年迄の筆記





- 一 川和田村に道場池と云有親鸞法談の古跡のよし城跡あり春秋尾張守居住のよし  
風土記ニ江戸弥太郎 兵部塚と云あり春秋兵部并娘二人道房始築と云
- の骸埋候由桜川といふ川あり膳棚淵日和不順の時なと鳴物する事有といふ
- 一 ア木葉下村ボケ児チゴヶ墓と云所に紫石あり御留なり
- 一 大橋村館跡あり竜貝と云所あり先年外岡美濃守と云者住せるよし
- 一 下古内村清音寺臨濟宗清音寺ハ京東山南禪寺附庸にて無
- 本寺開山復庵大和尚小田民部少輔の猶子也文保二年入宋中峯国師を師とす嘉暦三年帰朝佐竹の時寺領千石千貫と云伝ふ
- 佐竹系図有義公御奥書あり其外書翰等あり岩屋堂あり天正八年信太小太郎小山判官合戦の時判官利あらずして清音寺へ逃る小太郎進来て火を放ッ寺宇是か為焼亡す判官のかれかたく寺中普濟

産石地後を石碑上云川路

陸奥常州信太郎庄大村縣瑞輝寺住持紹融大檀那住

四位下前讚岐守源朝臣孝朝應安五年壬子四月五日

寺内十境

獅子岩

錦鏡池

蓬萊嶋

龍吟水

白蓮池

白蓮橋

白蓮峯

驪龍潭

紫雲嶺

補陀岩

産石地後を石碑上云川路

中品七斤位と云

一 塩子村佛國寺言聖心室性院事云々今并云々

面觀音初基の作前三十一面觀音弘法の作のより一岩居る

中あり絶景の起す地也観音堂出云云々

慶長三〇後陽成院倫方勅額あり中興天山年中開山教道寺

庵にて切腹す石碑上は川端にあり

鐘銘常州信太郡庄大村具瑞雄寺住持紹融大檀那從

四位下前讚岐守源朝臣孝朝応安五年壬子四月五日とあり

寺内十境 獅子岩 錦鏡池 蓬萊嶋

龍吟水 白蓮池 白蓮橋 白蓮峯

驪竜潭 紫雲嶺 補陀岩

産物茶銘初梅と云年々献上す其余りを売る上品一分三三斤

中品七斤位と云

一 塩子村仏国寺高野山宝性院末寺也郷中迄十八丁あり本尊十一

面觀音行基の作前立十一面觀音弘法の作のよし岩屋なり

中段あり絶景の地なり地上より觀音堂土台まで高サ五丈八尺と云

慶長三年後陽成院の倫旨勅額あり中興天正年中開山教導上

人武田信虎二男ありて云  
 持ニ信虎ノ二男ハ左馬之介信敏  
 ナルベシニ男ニハアルベカラズ

塩子村  
 佛國寺  
 地中界  
 國



- 一 亦然村ノ石多ク研石ノト云
- 一 関江村鐵福ノ関江太夫屋住ハナリ一塚ニテ居テ一塚ト云
- 一 高野村錫ノ産地ト稱スルニ云知ノ錫中倉あり村ノ者湯治廻ルヲ代料  
 取湯モ世々ノ爲メ金ノ事也ト云此邊ノ村ニササノノ村有テ業ト業ト云

人武田信虎二男なりと云 按ニ信虎ノ二男ハ左馬之介信繁

ナルベシニ男ニハアルベカラズ



一 亦熊村より石出る碑名にす

一 開江村館跡有開江彦太郎居住のよし塚有馬返し塚と云

一 高野村錫を産す橋壁と云所也錫小屋あり村之者錫掘納候得を代料

被下錫一貫八百目代金一匁也此近辺の村々きさみ煙草を業と葉不宜

友をたむかすうれしき山麓農家の書より書き行ふなりと云く四半

のり句を案ずりて代にわたりて位に愛するよし

一 観世音村二十一面観音寺は極好なる佛所なり徳一大師彫刻と云傳

一 八戸村緑岡法衣はあり寛文五年山々より法衣達より遊高枕亭

縁起法衣と唱神佛八景と内緑岡夜雨は福飲あり丸山是の縁起

の末は阿の縁起は考得の附丸山ゆきありてゆき縁起亭と云歎あり

拂く陶淵明の像をひきり遊則淵明堂と福あり今生傍にあり

椽と檜々椽と云

一 吉田村明神常陸廿八社の内當玉第三宮あり日本武尊を奉る

伊奈不拾五石

一 砥瀨村天妃神元福年中心越禪師勅後毎年三月廿六日水宮あり日

至礼湊砥瀨隔年持也祝所三洗濯盆と云賣色阿く先命は湊

至礼湊砥瀨隔年持也祝所三洗濯盆と云賣色阿く先命は湊

至礼湊砥瀨隔年持也祝所三洗濯盆と云賣色阿く先命は湊

故葉たはこ<sub>ニ</sub>てうれ兼候故農間の業にきさみにてうるなり四貫

八百匁壱箱にして代三分壱兩位に売るよし

一 観世音村に十一面観音岩へ堀付たる仏体なり徳一大師彫刻と云伝

一 見川村緑岡御殿跡あり寛文五巳年此山へ御殿御建被遊高枕亭

緑岡御殿と唱神崎八景の内緑岡夜雨御詩歌あり丸山是ハ緑岡

の末にあり緑岡御普請の時丸山へ小き御亭出来猩々亭と御額相

掛り陶淵明の像を御居（据）被遊則淵明堂と唱候よし今其傍<sub>ニ</sub>有る

橋を猩々橋と云

一 吉田村明神常陸二十八社の内当国第三ノ宮なり日本武尊を祭る

御朱印十五石

一 磯浜村天妃神元禄年中心越禪師勸請毎年三月二十二日二十三日兩日

祭礼湊磯浜隔年持也祝町<sub>ニ</sub>洗濯屋とて売色あり先年御漬

この山は延喜四年又この名に成り寛政五年六月洗滌成り  
目止心来遊めると唱

一 湊村鎮座は是の中興田中刑部任祐に比今淨光寺中とある天神  
社あり

常州那珂郡湊邑素菅廟我熱視之非菅氏神宮誤  
未安佛像異物所以除去新命東條常言彫刻彼像  
鎮座社内云

元禄乙亥春 源光圀肅具御印

成公より若森生名子と画像一軸西宮洞ら遊

義公内方として上石寄村親次ニル松山覽シテヨミト云フ

この山は延喜四年又この名に成り寛政五年六月洗滌成り  
目止心来遊めると唱  
一説にこの山は五文をを教法のと云

ニ相成候処延享四卯年又々御免ニ成り寛政五丑五月洗濯屋の名  
目相止以來遊女屋と唱

一 湊村館跡有是ハ中興田中刑部住居の由今浄光寺中ニなる天神  
社あり

常州那珂郡湊邑素有菅廟我熟々視之非菅氏神宮誤

来安仏像異物所以除去新命東条常言彫刻彼像

鎮坐社内云

元禄乙亥春 源光圀肅具 御印

成公より菅家真筆の画像一軸御奉納被遊

義公御歌として 上石崎村親沢ニアル松ヲ御覽シテヨミ玉フ

子を思ふ涙ひぬまの一ツ松浪にゆられて幾代経ぬらん

一説ニ子を思ふの五文字を親沢のと云



- 一 小吹村古江戸往還にて御殿も有之所元文二年長岡往還<sup>ニ</sup>成御殿も相引ヶ候由
- 一 城之内村古城跡有此村元来松平大学頭様御領分なり寛永四亥七月谷田部村と御引替<sup>ニ</sup>成ル公儀へ拘り（候）節ハ谷田部村と書出ス
- 一 鳥羽田村円福寺に巻上り不動有童舎寺に小栗判官照手姫の像とてニツ有 義公丸山雲平<sup>ニ</sup>被仰付小栗の系図あり遊行上人六字の名号有系図ハ予か漫録<sup>ニ</sup>記せる故略ス
- 一 小幡村古城跡城主の事郡図に載候故爰に略す千貫桜といふさくら有
- 一 下吉影村の前の川九十九曲りと云伝ふ 義公川水細く川筋直く<sup>ニ</sup>てハ水落早き故曲り多く御掘らせ被遊候と云水門<sup>ニ</sup>て水を留置舟へ諸品積候ハ、水門を開き其水勢<sup>ニ</sup>て北浦へ下る

小川村有碑記云々運送方必不云々碑記云々於邑之記也

一 又法村之長八堂と云々の親寧上人四十六歳の時在八宅、旅宿

之阿弥陀十二光佛一幅善導大師善教一幅聖徳太郎西影

一幅を志して長八にあふ代々所持す 義公曰く其意下

至今以一家の者遠國を去る為より旧福之 経塚 親寧善浄土三部

妙典陸小石と云々修長多々題。旧記今も稀め經名出ると云々之も塚

親寧善浄土の形御心休息と云々著其と云々一根二生の草

出也

和漢三方圓會 厭良防先祖名者子八者妻産死而幽美却人祈禳無驗

親寧上人多集小石自存三部經文理之塚以念佛既而伏怪不再見一族  
大喜余授法と云々上人之歸至赤根原薦赤飯無炬席採須久毛宇草代  
楚而後賜弥陀善導等及聖徳太子画像御經塚化生塚今在之至末孫喜八改宗  
為天台燈室之末國主水戸黄門見三軸画像且謂喜八曰性昔因縁人善所知而

小川村故城跡有今運送方役所二なる城主等の事郡図<sub>ニ</sub>記す小川三町とて大町横町田宿を云赤見地藏堂あり

一 与沢村二喜八堂と云有親鸞上人四十六歳の時喜八宅へ旅宿

の時弥陀十二光仏一幅善導大師真影一幅聖徳大師御影

一幅を書して喜八にあたふ代々所持之所 義公御うら書被成下

置今以一家の者遠国よりも尋来り旧跡也 経塚親鸞浄土三部

妙典経小石<sub>ニ</sub>書供養有趣旧跡今も稀に経石出ると云すくも塚

親鸞鹿嶋へ行脚の時休息の古跡箸芦とて一根二生の芦

出候よし

和漢三才図会厭良坊先祖名有与八者妻産死而幽霊劫人祈禳無驗

親鸞上人多集小石自書三部経文理之塚以念仏既而妖怪不再見一族

大喜僉授法与八送上人之帰至赤根原薦赤飯無筵席採須久毛宇草代

筵而後賜弥陀善導及聖徳大子画像御経塚化生塚今在之至末孫喜八改宗

為天台延宝之末国主水戸黄門見三軸画像且謂喜八曰往昔因縁人普所知而

近代改宗也 忘思夫本也 喜八梅耗即為願入寺 善子利變号 厭良坊 蓋鎮  
久毛字者石龍 葛田 吟云 是千似蘭而大草也

一 芥沢村此村往昔荒蕪なり 至徳年中芥沢氏五郎 芥沢小右衛門  
此村百屋住に何れが芥沢村と云 鎮取あり 芥沢は祖多氣徳治吉良  
忠繁なるなり 芥沢家系なる家系と云 芥沢は志長居住  
流し此より九鬼降侍を成根小舟一石四布長流なる家系なり  
土芥沢氏と云 諺教あり 千奪川 寛正に流 芥沢俊軒河童  
の子と知て抄あり 多しなりと云 千奪河童と云 骨接の奇方  
と云 千と乞ひ流しと云 遠志沢 旭集ト云借 毎年五月廿  
日 芥沢氏を理直の同少と云 出葉草と云 芥沢の潮来くと云 通は  
る里流と云 芥沢村八合の原あり

一 蕨村館跡あり 山中に数段強塚あり 古跡あり

近代改宗也忘恩失本也喜人悔非即為願入寺弟子剃髮号厭良坊蓋須

久毛宇者石竜芻 今云足  
毛 キ似蘭而大草也

一 芹沢村此村往古荒原郷なり至徳年中芹沢氏相州芹沢より下向

此所<sup>正</sup>居住其時より芹沢村と云館跡あり芹沢の祖多氣隱岐守良

忠築たるよし此外筑前屋敷原屋敷と云所有芹沢の家臣居住

跡の由丸丸峰侍屋敷根小屋小齊一石田四本長岐屋敷窄屋敷

等芹沢氏の古跡数多あり手奪<sup>テバイカハ</sup>川 寛正の頃芹沢俊軒河童

の手を切て持帰りたる所也と云其夜河童来りて骨接の奇方

をおしへ手を乞ひ帰りしと云遠志沢 旭卓ト云伝 毎年五月五日

朝芹沢氏百姓共一同此所へ出薬草を取芹沢より潮来への道に

百里海道と云所有二十二ヶ村入合の原なり

一 蕨村館跡あり山中屋敷経塚等古跡あり

一 石海子も龍潭あり

一 玉造村故城跡あり郡艦並郡國之委一ツ松岡村之西野田

之高を云ふ余四十十七百余

一 谷區村之鎮跡あり長三平間横二平百程也

一 濱村在福も在り其地聖徳太子作義公其地を以元禄年

中其地師可供大行三味之法會其年八月十日其地其年之度

古達は不他故、市、指合未玉十月部、同日、其地、弟、あり

大、仍、あり、船、情、生、其、地、あり、七、病、は、見、控、あり

一 川中子村館跡あり玉里八鎮の由ニ云傳

一 下玉里村鎮跡ニク不右向、井ニク不玉里、六舟、一因、船、隊、四、ク、不

玉里八艘、之、向、と、云、傳、あり

一 上玉里村鎮跡ニク不玉里八鎮、之、向、と、云、船、隊、三、ク、不、玉、里、八、艘、之、向

一 若海にも館跡あり

一 玉造村故城跡あり郡鑑並郡図ニ委し一ツ松同村高須新田

ニ有高一丈余廻り十七間余

一 谷嶋村<sup>ヤ</sup>ニ館跡有長二十間横二十間程也

一 浜村東福寺本尊薬師聖徳太子作義公尊慮を以元禄年

中より薬師開帳常行三昧の法会被仰付八月十二日より七日ツ、年々度

相建候所他領の市へ指合等有十月朔日より同十二日迄年々市相立

常行為御助精先年より小見せ物御見捨の事

一 川中子<sup>ナ</sup>村<sup>コ</sup>館跡あり玉里八館の由ニ云伝

一 下玉里村館跡三ヶ所右同断井三ヶ所玉里六井の内船塚四ヶ所

玉里八艘の内と云伝う

一 上玉里村館跡一ヶ所玉里八館の内と云 船塚三ヶ所玉里八艘の内

と云井部村の西里六并の内と云

一 高寄村 館跡と云所 玉里八館の内と云 船塚と云玉里八

艘の内と云并を所 船塚の内と云

一 完全村 高寄村と云又 船塚とも云空也 上人籠をこの原坂た  
る付に船塚と云行なむと云堂山といふ所を船ありて此の原頭

と云船塚と云の船と云也 八房より海に船の角の角の角と

云傳 右村の城跡と云菅原屋敷の築く所の船塚と云

一 安食村 在る久那宅に肉桂を自通りて七尺を寸廻りや

一 田伏村 二館跡と云 田伏次郎太夫と云者 居住の由

一 富田村 八古の香澄と云と云と云といふ字の所ニ館跡あり 長八十

横廿間 中山と云所も館跡あり 長四十間余 田代と馬場河 長百五十間  
余 横三十間余 余横三十間余

一 舟秋塚 三平余あり是ハ元元辰麻生富田境論に節は塚と云

と云井二ヶ所玉里六井の内と云

一 高崎村館跡一ヶ所玉里八館の内と云船塚一ヶ所玉里八

艘の内と云井一ヶ所玉里六井の内と云

一 宍倉村馬場平三本松又鞍懸松とも云空也上人寵愛の鹿煩た

る時此松へ鞍をかけ□置と云堂山といへる所<sub>ニ</sub>松あり右の鹿殞

タル後埋候印の松と云由八房了海所持の鹿の角ハ此鹿の角と

云伝右村<sub>ニ</sub>城跡有菅谷隱岐守築く事ハ郡鑑<sub>ニ</sub>詳なり

一 安食村莊屋久助宅<sub>ニ</sub>肉桂有目通りニて七尺一寸廻り也

一 田伏村<sub>ニ</sub>館跡有田伏次郎太夫と云者居住候由

長八十

一 富田村ハ古の香澄郷なりと云霞と云へる字の所<sub>ニ</sub>館跡

間余

横<sub>ニ</sub>二十間 中山と云所<sub>江</sub>も館跡あり

長四十間余

横三十六間余

同所<sub>ニ</sub>馬場あり

長百五十間  
余横三間余

千秋塚三十余有是ハ元文元辰麻<sub>アサウ</sub> 生富田境論の節此塚を堀候

清六炭之徳利ニ成市以境塚ナリ

一 清水村大山守次兵衛宅三景之碑河居宅カ眺望ニ死ナリ  
自古王侯自有山莊名園而豪富之人亦設家園或  
別莊以為遊樂之所皆聚奇石名木以作假山泉池然  
而祇有庭中之少景而延遠方之多景鮮矣常州大寄  
生風采雅致其所居名松濤齋卷簾眺望則名山大川  
悉落于睥睨之中總四方八勝奇景云尔因得京師紳  
縉名家之詩欲彫石建諸庭際以傳不朽遂謀余々  
謂曰去京千有餘里而有若人而作若事者是奇哉八  
詩成迺錄其官位姓名以還之云

昔安永乙未京兆香川景興謹書

潮耒秋月

南溟 四辻前大納言藤原公亭卿

一  
えハ炭有之勝利ニ成て御境塚なり

清水村大山守次郎兵衛宅ニ八景の碑あり居宅より眺望景地なり

自古王侯自有山莊名園而豪富之人亦設家團或

別莊以為遊樂之所皆聚奇石名木以作假山泉池然

而祇有庭中之少景而延遠方之多景者鮮矣常州大崎

生風采雅致其所居名松濤齋卷簾眺望則名山大川

悉落手睥睨之中總四方八勝奇景云尔因得京師紳

縉名家之詩欲彫石建諸庭際以伝不朽遂謀余々

謂曰去京千有余里而有若人ニ而作若事者是奇哉人

詩成迺録其官位姓名以還之云

時安永乙未京兆香川景與謹書

潮来秋月 南溟 四辻前大納言藤原公亭卿

潮未村前明月開。月光夜々与潮来。素輝何處最堪賞。霞浦秋清江水隈。

富田落雁

養一 藤波三位大中臣季忠卿

江句秋深肥稻梁。相呼群雁下斜陽。誰家遠寄天涯信。家々寫雲為幾行。

芙蓉積雪

滄州

勘解由中路左京權大夫藤原近光

何求嶽色海雲端。突兀兀峰封雪看。避暑滿堂類欲醉。炎天積素射人寒。

浮嶋夜雨

峨眉

千種三位源有政

蛇峰雲影鬱難開。夜雨蕭々逐浪来。風起蓬窓燈火乱。明朝賈客待晴回。

海了晚鐘

景貫

正四位下山并備中介姓太神名景貫伶人也

落照半含霞浦開。鐘聲漸動梵王臺。歸帆幾點波濤面。隱々送將海月来。

霞浦歸帆

光興

從四位下松波幡磨身姓藤原名光興院苗也

晚霞離浦明燒浪。斜日逗林光射鷗。多少風帆歸盡去。西巖只有一漁舟。

筑波夕照

北海江村綬

字君錫林傳左門昔仕今上

潮来村前明月開月光夜々与潮来素輝何処最堪賞<sup>ス</sup>霞浦秋清江水隈

富田落雁 養一 藤波三位大中臣季忠卿

江旬秋深肥稻梁相呼群雁下斜陽誰家遙寄天涯信家々写雲為幾行

芙蓉積雪 滄州 勘解由小路左京權大夫藤原近光卿

何来嶽色海雲端突兀三峰封雪看避暑滿堂頻欲醉炎天積素射人寒

浮嶋夜雨 峨眉 千種三位源有政卿

蛇峰雲影鬱難開夜雨肅々逐浪来風起蓬窓灯火乱明朝賈客待晴回

海了晚鐘 景貫 正四位下山井備中介姓太神名景貫伶人也

落照半含霞浦開鐘声漸動梵王台帰帆幾点波涛面隱々送将海月来

霞浦帰帆 光與 從四位下松波幡曆守姓藤原名光興院北面也

晚霞蘸<sup>（蘸）</sup> 浦明燒浪斜日逗林光射鷗多少風帆帰尽去西巖只有一漁舟

筑波夕照 北海江村綬 字君錫称伝左衛門昔仕今上

中天積翠筑波山影落平湖激灑間朝星何如斜景羨紅霞隱映白雲珠

香取晴嵐

清絢

清田文典名曰絢字君錦北海之弟任越前福

長流汝野畫中生曉色蒼涼望更清日出神宮烟靄動松杉深處一鳩鳴

升侯

安永四年之冬以松濤八詠予香川先生之序文刻石於庭中以謀不朽於永年也有客曰嗚呼美乎是設也抑四方之壯觀而千秋之美談也何有於其不朽矣更播紳名家之著述片言隻語苟得之也華袞之履不啻也而况揄揚於吾人之賞者哉蓋詩由景以播不朽之藻於海內也景由詩以揚不朽之跡於日邊也若於不朽之隆事則可不謂無與二哉夫然後不朽其不朽則賢主人焉爾謝曰僕不敢當已而客去矣顧如其言不可廢然乃載筆也

松濤齋大崎安通

中天積翠筑波山影落平湖  
瀲灩間朝星

何如斜景美紅霞  
隱映白雲斑

香取晴嵐 清絢 清田文與名曰絢  
字君錦北海之弟仕越前福井侯

長流沃野画中生  
曉色蒼涼望更清  
日出神宮烟靄動  
松杉深処一鳩鳴

安永四年之冬以松濤八詠  
与香川先生之序文刻石於庭中  
以謀石朽

於永年也有客曰嗚呼美乎  
是設也抑々四方之壯觀而千秋之美談

也何有於其不朽矣夫  
本ノママ 搢紳名家之著述  
片言隻語苟得之也

華袞之褒不啻也而况揄揚於吾人之賞者哉  
蓋詩由景以播

不朽之藻於海内也景由詩以揚不朽之跡於日辺也  
若於不朽之

隆事則可不謂無與二哉夫然後不朽其不朽則賢主人焉爾  
謝

曰僕不敢当已而客去矣顧如其言不可廢然乃載筆也

松濤齋大崎安通

一 徳徳村在塔ハ徳徳左邊ノ築キ事ハ那世那國小集

一 乙五村曹洞宗長國寺也云云祝香

予得得古佛聖觀音堂軀壯飾寄附常妙行方郡上戸  
村長國禪寺現住飽林和尚安置正殿云

元録年 源光圀御判

一 嶋崎左衛門尉の名研あり真言宗觀音寺中興開基大且那

内藏頭平国安と云傳ふ

一 潮來村臨濟宗長勝寺古鐘あり元徳庚午年鎌倉圓覺寺妙

節長老の節鑄年一鐘の銘ハ清拙和尚と作古鐘ハおろし玉尚付

用ひたると云の鐘あり記福也まかくは鐘牙もそ頼朝公建玉の

鐘授のよし文活核と云核もあけも粒粒公核ら申さると申傳へ

と云り一 座隔核もその八座の白なり元承六核くおこな核く

一 嶋崎村故城ハ嶋崎左衛門築く事ハ郡鑑郡図ニ委し

一 上戸村曹洞宗長国寺本尊正観音

予偈得古仏聖観音一軀加莊飾寄附常州行方郡上戸

村長国禪寺現住鈍林和尚安置正殿云

元禄年 源光圀御判

一 嶋崎左衛門尉の石碑あり真言宗観音寺中興開基大旦那

内蔵頭平国安と云伝ふ

一 潮来村臨濟宗長勝寺古鐘あり元徳庚午年鎌倉円覚寺妙

節長老の節鑄直し鐘の銘ハ清拙和尚の作古鐘ハおろし置当時

用ひ候かねハ別の鐘なり記録等もなく此鐘計にて頼朝公建立の

証拠のよし文治梅と云梅有これも頼朝公植られたりと申伝へ

たるよし座論梅にて八エの白なり元木ハ枯て前ニたをし置

其後の松と云東東菴菴種種の肉桂あり云折折なり

古鐘銘

予摺摺りて託託之

常陸國海雲山長勝禪寺鐘銘有序寺始於文治元年  
右大將殿時所立也迨今元德庚午百二十餘載乃為錄  
倉殿御願所大檀度道曉禪門以古鐘未完未完与貴春等  
共施財新而大之住持妙節長老請於圓覺清拙叟為  
之銘曰

維古蘭若

長勝殿名

寸筵微撞

今器未完未完

爰命龜氏

銘範速成

鏗々訇々

殷雷吼鯨

音聞佛事

開聾啓音

大哉圓通

十虛廓清

霜天月曉

落景初更

真機善發善發

衆夢齊驚齊驚

深禪偃仰

苦趣休停

客船夜泊

常陸蘇城蘇城

其後の根はへと云東京種トシキンの肉桂あり甚朽かゝりたり

古鐘銘 予摺りて蔵す

常陸国海雲山長勝禪寺鐘銘有序寺始於文治元年

右大將殿時所立也迄今元徳庚午百二十余載乃為鎌

倉殿御願所大檀度道暁禪門以古鐘未宏與貴春等

共施財新而大之住持妙節長老請於円覚清拙叟為

之銘曰

維古蘭若 長勝厥名 寸逞微撞 今器未宏

爰命鳧氏 鎔範速成 鏗々訇々 殷雷吼鯨

音聞仏事 開聾啓盲 大哉円通 十虚廓清

霜天月暁 落景初更 真機普発 衆夢斉驚

深禪偃仰 苦趣休停 客船夜泊 常陸蘇城

上苑唐筭

海雲日橫

元德庚午十月一日書

通圓圓月

妙勝妙龜

如見妙一

光圓善妙

了心妙圓

下息戈兵

青山崢嶸

人天號令

道起秀光

道妙淨圓

妙西道實

清阿二親

祚運維那見道

檀門茂盛

人天號令

貞種種立

定祐淨妙

願主願念

寂仁上心

淨心隨仰

梵刹堅貞

祖道通亨

清原高秀

行佛妙印

生阿彌五

淨心隨仰

大工甲斐權守助光

住持傳法沙門妙節

大施主下総五郎禪門道曉

大檀那相摸禪定門崇鑑

上延睿算 下息戈兵 檀門茂盛 梵刹堅貞

海雲日橫 青山峰嶸 人天号令 租道通亭

元徳庚午十月一日書

通円円月 道超秀光 貞種種立 清原高秀

妙勝妙龜 道妙浄円 定祐浄妙 行仏妙印

如見妙一 妙西道実 願主願念 生阿弥五

光円善妙 清阿二親 寂仁上心 浄心随仰

了心妙円 祚運維那見道

大工甲斐権守助光

住持伝法沙門妙節

大施主下総五郎禅門道暁

大檀那相模禅定門崇鑑

太文所栢元福寺中臥龍形と名付く栢 上表に記云傳中

龍龍全ハ刺穿をり 甚念年を又宅不獲強採もて出り其

上守目通りと云云二守りて其を又五人に分るての數多し

は村不慮使ハ或坐視息極へては計幾多ハ九と計

一 大洲村の法樹木燭を紅何國密林と云ハ栢子落皮密林北枝に

代ミカハ有田ミカハ九子母橋也

一 辻村結吉硯宮と云非詳ハ頼朝公のまよふ宮一硯のより一宮跡在と

記云石よりと云九りナカハ祭礼と云又せしと云

一 延方村石公吾妻の宅ニ霸王樹あり栢と云二尺二寸枝百六十枚

余洲海と云不善門泥巾等北花并洲海北花と云徳島新田

元禄六年他死下如木と云北争論と云此裁許も延方の村同と云

三十年不と云延方村曲り栢と云此廻船十九艘入と云

右文治梅元禄年中臥竜梅と名付候様 上意の由云伝ふ

旅籠屋八軒買色あり 莊屋平太夫宅に蘇鉄根にて廻り五尺

二寸目通り<sup>ニ</sup>て二尺二寸高一丈五尺其外そてつ数多あり

此村より鹿嶋へ二里程息栖へ三里計銚子へ九里計

一 大洲新田御樹木畑有紀伊国蜜柑しらハ柑子薄皮蜜柑肥後ミかん

八代ミかん有田ミかん九年母橘有

一 辻村鎮守硯宮と云神体ハ頼朝公の手にふれし硯のよし馬蹄石と

か云石なりと云九月十五日祭礼の節見せると云

一 延方村庄屋五郎衛門宅<sup>サホテ</sup>覇王樹<sup>ン</sup>有り根<sup>ニ</sup>て廻り二尺二寸枝百六十枚

余洲崎と云所普門院本尊地藏并洲崎地藏と云徳嶋新田ハ

元禄六年他領下畑木と土地争論の所御裁許<sup>ニ</sup>て延方の新田となる

三十年ほと以前延方村曲り松と云所へ廻船十九艘入候事有之庄屋

其の事、知事の手記に、美濃地方、先祖母咄、御来下、八廻、秘  
教被、赤入、山、百、年、わ、り、ま、り、あ、り、ま、り、と、云、今、ハ、進、ミ、村、田、ヲ、成、ル  
は、こ、ろ、ア、チ、と、云、て、あ、り、花、と、云、是、是、繩、綱、と、云、り、と、傳、ふ、か、  
麻、あ、け、と、云、り、も、輕、重、あ、り、と、云、延、方、海、邊、ハ、大、船、浮、ハ、舟、十、八、丁、大、船  
浮、ハ、産、島、の、社、ハ、十、八、丁、と、云、陸、傍、彩、田、長、サ、三、十、丁、奈、有、

一 坂之内村古懋於有佐介の長小貫大花築く郡國郡邊と云

一 他領大生村は大生市右衛門、碑有、云、氏、大、生、及、協、と、云、系、の、身、と、云、

大生原大生氏之塚石碑

大生彈正平定守世領常州大生邑自先祖專武名至  
定守父五代敢死於戰場其後仕土井大炊頭利勝慶長十九  
年趣大坂役十二月十四日病死於駿州藤枝嫡子仁兵衛  
定仍仕利勝別賜祿故其嗣家督利勝掌天下權之時

五郎衛門幼年の節見物ニ參候由右の者祖母咄ニ潮来下へハ廻船

數艘乗入候由百年ほとも以前なるべしと云今ハ追々新田に成る

此辺にてアチと云て水中江杭を立是繩綱をはり袋の所へ本

麻あみをはり置鯉鮎等を取延方洲崎より大船津へ舟十八丁大船

津より鹿嶋の社へ十八丁と云徳嶋新田長サ三十丁余有

一 堀之内村古城跡有佐竹の臣小貫大藏築く郡凶郡鑑ニ委し

一 他領大生村<sup>オ</sup>に大生市左衛門の碑有土民大生殿塚と云原の中ニ有

大生原大生氏之塚石碑

大生彈正平定守世領常州大生邑自先祖專武名至

定守父五代敢死於戰場其後仕土井大炊頭利勝慶長十九

年趣大坂役十二月十四日病死於駿州藤枝嫡子仁兵衛

定仍仕利勝別賜祿故其嗣家督利勝掌天下權之時

別國諸侯大夫有未欲告利勝者必定仍達之某亦預利  
思顧利勝卒時別有命令鞠育教誨幼子能登守利  
房矣定仍慶安三年病死其今六旬有四年不幾雖  
不能立身行道歆揚名於後世以顯父母故表石

明曆二丙申年七月十四日 大生市左衛門平定年

一新活陽科十六活の内十七活並一にて千餘の進と云ふ事あり由

至無官内式上活石向と云ふ事と云考新活人後許公由能合存  
右新活人子正光と云事付取載取示抄と云事書訂上と云事取  
人方之原形と云事と云事付取載取示抄と云事書訂上と云事取  
不括出と云事及と云事為抄と云事御川村内下松村と云事松村岩と云事  
松村と云事と云事活と云事有と云事人子括出と云事松村岩と云事御川村内下  
振と云事原形と云事取載取示抄と云事書訂上と云事書訂上と云事

別国諸侯大夫有來欲告利勝者必令定仍達之某亦預利

恩顧利勝卒特別有命令鞠育教誨幼子能登守利

房矣定仍慶安三年病死其今六旬有四余年不幾雖

不能立身行道欲揚名於後世以顯父母故表石

明曆二丙申年七月十四日 大生市左衛門平定年

一 新嶋御料十六嶋の内上の嶋第一一にて其余ハ追々に出来候由

東照宮御代上の嶋石田主馬之介と云者新嶋の儀 許（訴）出御繩入候ニ付

右の新嶋人馬御免の御墨付頂戴致所持候所中興御引上ニ相成御役

人方の印形の證文ニ相成候由仍而御猪狩 日光ニ御社参等之節も人馬

不指出候由此度の御鹿狩ニハ八筋川村内ホクケヒト杭トと認村名書出候ニ付ト

杭村と有之ハ十六嶋の外ニ有之間人馬指出候様御達相成八筋川名主書

振不宜候故達而致訴訟候得共不相濟ト杭分指出候由ニ相聞候と上戸牛



堀庄屋之話右の石田主馬之介の子孫清兵衛と申候は上の嶋の名主

ニて御証文も致所持居候と申候由

一 三ヶ村四ヶ村逆野田の続ニ有之三ヶ村ハ一村の名四ヶ村ハ下田宮田立延

中根是を四ヶ村と云 公儀より道杭等立候節向四ヶ村と書付候て右の

立延中根等の小名ハ無之由前四ヶ村と云ハ川より南の方ニて辻村小井

戸村大橋四ヶ村との事と云四ヶ村の内より辻小井戸大橋分れたると見

へたり前四ヶ村の内ニは四ヶ村と云一村も組入候て四ヶ村の由野田村庄屋

忠之衛門話

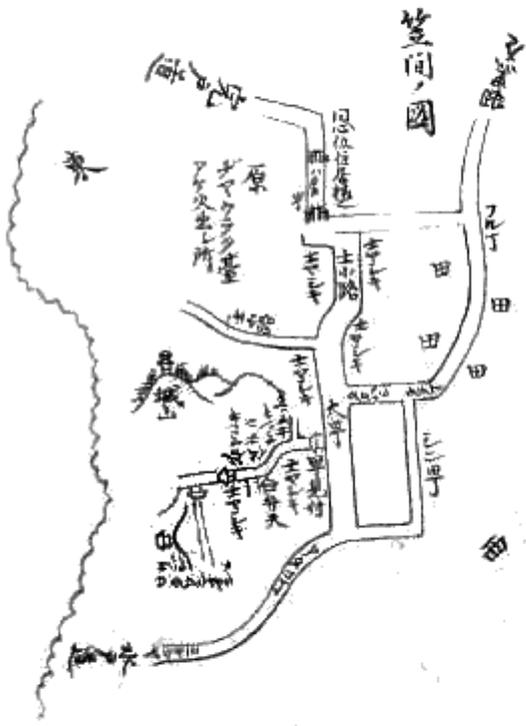
一 宍倉領近の村名有川牛渡木田余と訓

一 角来村ハ古稻云の新田の由鶴沼ハ深谷の内白鳥ハ沼より南な

りと大山守市之衛門話南野田境の川浚候時又ハ御立山境焼の節

人足を他領下田よりも指出候由

一 奥羽村よりらん橋と云ふ小き板橋より東にたたら伏と云流るる池  
 二 小みそろの池と云ふ川邊のふかしの秋層出するりよる池  
 一 大橋村の福田大淵と市毛は笠間と云ふ笠間の定戸の市毛寺  
 城完戸大田町古町と云ふ鯉淵村の小林山原市原日草場笠間





全圖と門は小高札あり、士路は極道の普請と云々據ちと一橋あり  
 丸の内大石花と亦左を門をへく右と方と云々今嬪子に徑ありと云々  
 さうして化ち老子の石大塚とに大石を為すの向と亦花西と云々  
 徑ありと云々今二王門と大石と云々今大石の傍り向の飛と云  
 由花と亦我像を彫りけし時國君と云々西遊と云々、江入と云々



屋敷の門々に宿札あり士小路ハ領主の普請と見へ塀なと一様なり  
丸の内大石内蔵之介居屋敷門を入れて右の方ニ有今嫡子の住居いたさ  
さるゝ由家老千二百石大祿の由大石元屋敷の向ニ家老西郷十郎衛門  
住居大手の向合ニ王門有大黒石と云高六間大黒の後ろ向の形と云  
内蔵之介我像を彫かけし時国替の事御達ニて急き江戸へ登り

笠間城

後より見たる図

此や六三ノ間ニ  
七間アリ  
四方ヨリ  
見ユル





二番家老へ頼候所大黒に刻して今観音堂<sup>ニ</sup>ありと言佐白

観音に三重塔有先年遠目かね相済候様領主へ願出候由の

所水戸の御城見へ候間不相済との由所々者の話帯刀の者ハ脇

指たりとも不入尤脇指なしとも案内の者不付候得は不入候宿より

案内出る一人<sup>ニ</sup>ても十人<sup>ニ</sup>ても五十文ツゝなり人数何人と申を手

形<sup>ニ</sup>書記案内の者持参町見付へ納候由案内の者ハ脇指を

帯し入候大手よりハ女人不入在国の節も下屋敷<sup>ニ</sup>住居のよし下

屋敷丸の内<sup>ニ</sup>有と云笠間より下市毛手越宍戸元町岩間府

中と江戸街道へ出る

一 玉造村白井小衛門庄屋を勤む玉造与一太郎の三男の子孫なり

母ハ白井備後守と云者の女<sup>ニ</sup>て母の姓を續て玉造<sup>ニ</sup>隠れ住候由

当小衛門四代の祖小衛門の節大山守与沢村喜八庄屋ハ惣介勤



居候所喜八跡之大山守惣介<sup>ニ</sup>被 仰付小衛門庄屋被仰付候右の小衛門

親 義公より召候所其頃ハ浪人立居り候如何之事と安心不致

罷在候処軍用金四百兩所持の沙汰有之間夫を御取上にも可

相成と申聞候者有之其金子ハとくに遣ひ捨候如何致可然候忒度

相談候所病氣二度不罷出方宜候由とて其旨申出候得ハ御医師被

遣金一兩二分と御夜着被下置候由御夜着ハ五所丸御紋を青く綾の

如く織の色々の染糸にて大縞<sup>ニ</sup>おり其間<sup>ニ</sup>鱗の形を織候是ハ地

同く白く有之候零落の節うらと綿ハ売払候而当時の裏綿ハ（ママ）

等ハ追而拵候よし

西山公より涅槃の図一枚被下置候是ハ彩色間違候て所々御指図

書有之候品なり右二品ハ今に所持致候一休筆唐詩紅緑鳥愈

白の一首を認候古筆家極メ文通共<sup>ニ</sup>有義弘之短刀所持の由

名屋白井水馬の法大寺大坊也介と名有り家系也

他餘西蓮寺村と水馬の先祖にて病ゆ成に水馬村を造つて也

降つて水馬の馬の鬃を其寺と西蓮寺村を馬の寺と名付

爲り却て水馬の寺と名付し其寺と西蓮寺村を馬の寺と名付

新方氏の中と記す也

一 水馬村大杉野井水馬極聖宮之集話人水馬の寺と西蓮寺の両側

町久しとん流者水馬の寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の

寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の

寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の

寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の

寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の

寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の

寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の

寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の

寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の

寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の集話人水馬の寺と西蓮寺の

庄屋白井小衛門話大山守大場惣介与一太郎の家来の由

他領西蓮寺村<sup>ニ</sup>て小衛門先祖の馬病候故其所へ頼置馬をかり

帰り候後小衛門馬ハ斃候所其馬を西蓮寺村藤衛門と申者方<sup>ニ</sup>て

祭り置候由不祭候へハ不吉の事有之鎮守<sup>ニ</sup>致置候藤衛門先祖ハ

行方氏の家中とか云伝ふ

一 安場村大杉明神至極宜宮云也參詣人も不断有之<sup>ニ</sup>町計の兩側

町けんとん酒肴等家毎に売候道者泊り不絶有之由町も随分相応

<sup>ニ</sup>相見候名物せんへい有一包八錢ツ、百文分とゝのへ候得ハ十四包<sup>ニ</sup>売

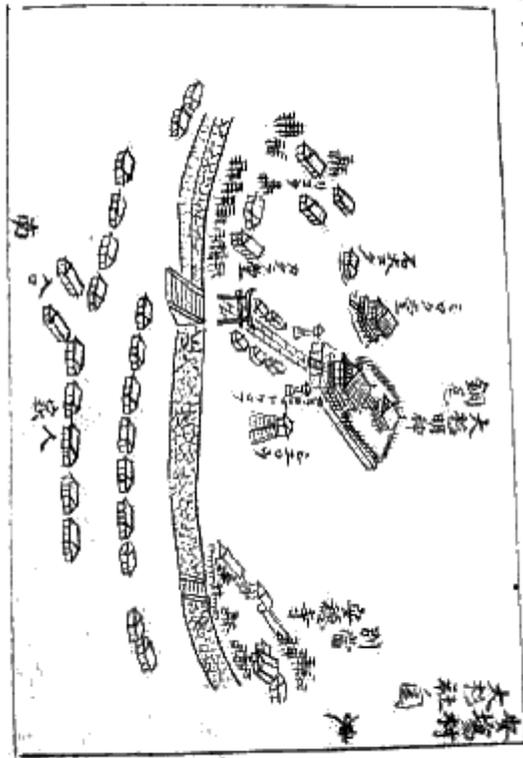
候金灯籠高サ六尺計慶安五年と有葵御紋付なり本社祠瓦

なり石の鳥居の兩側十間計<sup>ニ</sup>菓子小間物楊枝見せ等有切石の下

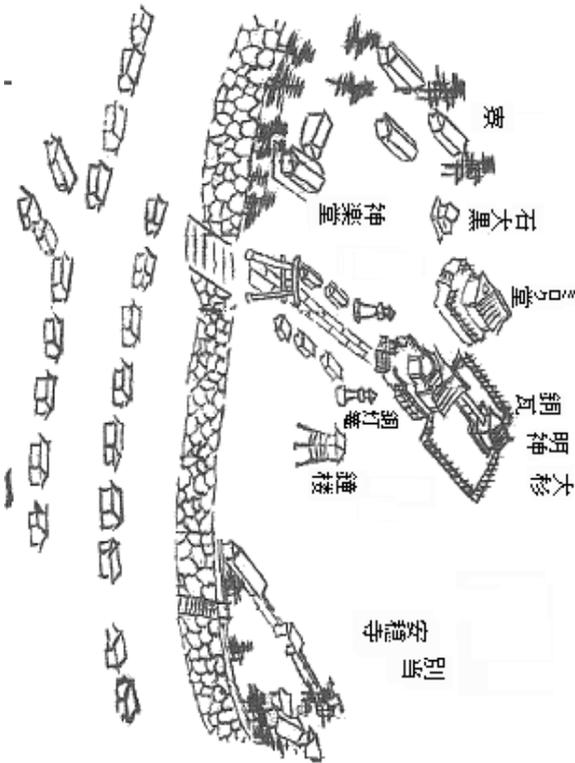
<sup>ニ</sup>も菓子売有出居る鳥居之脇<sup>ニ</sup>手水有兩人付居る社内<sup>ニ</sup>も菓

売出ル右の方別当安穩寺相応の寺<sup>ニ</sup>相見候鳥居の右ハ石垣普

法王寺一方の古名種あり、此寺公儀は古くより上野宮様  
 持し云々不詳、勒堂是又云々善信あり、是れ物毛屋振と六七  
 間四方も有し、種樹之煙ハ不詳云々也。



請有左之方は半石垣なり惣而公儀御ふしんなりと云上野宮様  
 持と云左に弥勒堂是又よき普請なりえり物瓦屋根にて六七  
 間四方も可有之鐘楼有鐘ハ不懸置候へき





- 一 佐加村歩崎觀音景地なり霞浦臨む觀音の宝物<sub>ニ</sub>金の機道具  
有之佐加村百姓 名忘れたり富田村  
庄屋惣之介妻子也 預り置由七月十五日<sub>ニ</sub>
- 一 竜灯あかる其夜籠り候者ハ見すよし
- 一 霞浦三ツ又沖に府中国分寺の鐘沈居候由是ハ先年盜賊盜取  
候て舟<sub>ニ</sub>て參候所船中ニて鳴出ニ付盜も恐れて水中へ投入候今に  
夜中度々光リ物等有之里人はハ右之鐘帰り度故<sub>ニ</sub>右之通り光り  
候と申伝候由
- 一 銚子口より潮の指引ハ息栖前迄なり汐満候節牛堀前迄水ハ  
通し候由
- 一 上石崎東円寺と云所有古寺跡之由先年御潰<sub>ニ</sub>相成觀音ハ小石  
川御庭<sub>江</sub>曳る<sub>ニ</sub>二王ハ村松<sub>江</sub>被遣候由申伝候由
- 一 秋葉村人家ハ足黒土地也先年足黒<sub>ニ</sub>御殿有之節被仰付候<sub>ニ</sub>付引

越とてや傍古く常陸の形もつてもつても秋葉お地之内の市  
富元分たに三宮志持かまを大山大山ちやんと市作

一 麻生領大生明邦大同年中に麻生を麻生といふ一季以来に  
産と云上月十の麻生物忌来年と祭ると云ふ社あり

一 鹿嶋和苗金を西成庚に五万石五百年也實政甲寅年也

一 鹿嶋明神宮成庚西向大船津の鹿嶋明神とて根本寺鎌足  
祭神武甕槌命御斎称宜三百名東長門守別當百三十六名惣大行事  
二百名鹿嶋出羽守護摩三十三名護國院本社家二十人新社家二十人外  
二称宜社僧多し

と云前二細キ流まを鶯川と云ち中波越松と云ふ麻生社あり  
要石井寅の方四五丁の物忌辰と方十三に丁を麻生町の町根町  
大町中町新町と云ふ町と云東西宮井と号する分一里餘を麻生  
の息柄二里番久人三里番麻生の社八丹まを以莊飾を麻生

越候と申伝右の節引替候事ニも可有之旨秋葉土地の内に本  
嶋飛々<sup>ハタトヒ</sup>足黒持分有之由大山守五郎三郎話

一 麻生領大生明神大同年中之鎮座ニて鹿嶋よりハ一年以前ニ鎮  
座と云十一月十五日鹿嶋物忌来り年々祭る有と云小社なり

一 下総松苗金一両ニ一万四千五百本也寛政甲寅年也  
一 鹿島明神宮 戊亥<sup>西向</sup>の大船津より鹿島明神への道ニ根本寺鎌倉

祭神武甕槌劍御斎称宜三百石東長門守別当百三十六石惣大行事

二百石鹿島出羽守護摩三十石護国院本社家二十人新社家二十人外

ニ称宜社僧多シ

と云前ニ細キ流れ有鶯川と云寺中波越松と云有鹿島社より

要石丑寅の方四五丁有物忌辰の方十二四丁有鹿島の町桜町

大町中町新町すミ町と云東西宮中と号する分一里余有鹿島

より息栖へ二里香取也三里香取の社ハ丹青を以荘飾有鹿島の

社は皆木造なり。藤原松代は根より又茅を生長を富田 新田の権  
之と名と云  
おまう

一 息栖の宮西高きなり。昔は男瓶一瓶あり。いま中水あり。いとも御あり  
こくも生るあり。と云。息栖の桃子川口は六里。息栖の東一里。計  
小業の池は息栖の南。取入。舟取。之。水。注。の。宮。が。陸。十。八。町。と云。

一 此辺の村国未知手と訓を

一 加藤洲は十二に橋あり。橋あり

一 佐原の狭き所なり。と云。とも云。娘なる所。之。小坂。仁。徳。門。と云。高  
岡の者あり

一 香取明神。その四月五日。農具市なり。五日。田種。より。自。給。之。日  
よ。高。人。高。所。引。續。娘。と云

一 石崎洞沼浦。長二里。十二丁。横十二丁。廿五丁。近浦中央。は。新。境。也。

社ハ皆白木造なり鹿島松伐候得は根より又芽を生ず

富田  
嘉衛門話ニ

フシクロと云  
松なり

一 息栖の宮西向なり前ニ男瓶一瓶水中ニ有此中水ツいつとても潮水

ニ入らず真水なりと云 本ノママ 息栖より銚子川口迄六里息栖より東一里計

に業の池有息栖より香取へ舟路三里津の宮より陸十八町と云

一 此辺の村国来知手と訓す

一 加藤州に十二の橋有小橋なり

一 佐原ハ狭き所なりといへとも甚賑なる所也小堀仁衛門と云豪

富の者あり

一 香取明神にて四月五日六日農具市たつ五日ハ田植有之由朔日二日

にハ商人荷附込引続賑候由

一 石崎酒沼浦長二里十二丁横十二丁より二十五丁迄浦中央御領分境なり

俗三廣浦と云、涸沼、巖沼、川上を巖川と云、長尾在太夫景福初りき

一 高久村鎮主社三惡路王三頭

惡路主頭形年久、敗朽、今新彩飾、安座、常州高久邑

安塚之社中云々

元禄癸酉歲 光圀御印

惡路王、原有縁起、記云、田村將軍惡路王退治、云いて、後、其形を彫刻、社内納り、年久、敗朽、故、折換し、義公、考、意、其、大田丸、彩飾、合、有、又、社中、白、納り、遊、以、其、形、白、木、象、内、入、涉、其、の、後、紗、包、玉、を、作、な、く、ま、り、結、髪、を、其、髻、水、く、伸、ひ、白、髪、な、り、祠、友、云、く、安、塚、古、休、塚、と、云、持、原、本、像、三、龜、之、三、王、似、う、二、王、也、河、上、す、祠、友、の、い、と、く、夜、叉、神、な、り、と

惡路王縁起

俗ニ広浦と云涸沼ハ簸沼か川上を簸川ヒソと云長尾左太夫景福有りき

一 高久村鎮守の社ニ惡路王の頭有

惡路主頭形年久敗朽今新彩飾安座常州高久邑

安塚之社中云々

元禄癸酉歲 光圀御印

惡路王の頭有縁起左ニ記す田村將軍惡路王退治し玉ひて後其頭

形を彫刻し社内へ納候由年久敷事故朽損し義公尊慮にて大

田九藏へ彩飾被仰付又社中江御納被遊候頭形白木箱の内へ入淺黄の

服紗ニ包置其面体たくましく雉髪にて髭永く伸ひ白髪なり

祠官言く安塚ハ古休塚と云拜殿ニ木像ニ軀有二王ニ似り仁王にあら

す祠官のいわく夜刃神ヤシヤなりと

惡路王縁起

人王五十代桓武天皇御中延曆二十年辛巳陸  
奥国夷賊高丸達谷窟起駿河国清見関攻上征  
夷將軍坂上田村麻呂節口賜進發高丸退奥州  
引篁田村麻呂續奥州攻入合戰神樂岡云所射  
殺又惡路王云賊乎云々

但延曆辛巳より安永八寅迄一千三十三年ニ成ル

享保十巳年九月 成公上流ニ遊彦

追加

東鑑治承五年以常陸國橋々々以麻鳩の社も寄なることあり阿  
橋々のゆきを小宮山昌秀ニ問「小是即和名抄の茨城郡立布也  
今の行方郡羽生村ニ坐る人今橋郷也也伊橋明津と申は坐  
其之大祿也也申不之録詠に坐以今ニ除き地かよ申るも麻島大祿也也

人王五十代桓武天皇ノ御宇延暦二十年辛巳陸

奥国夷賊高丸達谷窟ヨリ起り駿河国清見関マテ攻上ル征

夷將軍坂上田村麻呂節刀ヲ賜り進発ス高丸退テ奥州へ

引籠ル田村麻呂続テ奥州へ攻入合戦シ神楽岡ト云所ニテ射

殺ス又悪路王ト云賊モ平クト云々

但延暦辛巳ヨリ安永八亥迄一千三十三年ニ成ル

享保十巳年九月 成公上覽被遊候

追加

東鑑治承五年以常陸国橘郷ヲ以鹿嶋の社に寄奉ると云事あり

橘郷の事を小宮山昌秀ニ問しに是即和名抄の茨城郡立本（花）郷ニテ

今の行方郡羽生村ニ御座候土人も橘郷と申伝へ橘明神と申も御座候

其上大祢宜と申所ニ館跡御座候今ニ除キ地少々計有之鹿嶋大祢宜羽

生氏の所勢を坐せたるに非ざりし時大將宜法純を捕へ  
居し而苗氏ニ存せしと申しあるに今の沖海八本府余敷迄を皆

橋の中を以てさし置けり方入申は何年の事歟あはれり度

伊政正南郡跨國と云々なりと云ふに或は此は及至富田

村に坐す海援地と云ふは程遠かざるに右と道小宮山氏

や耳友郡鑑をもとん小富田村鉾に云々と云ふ字河橋郷も

羽生村郷も橋明非也之山の字も橋と云河も以上追加富田村香澄郷へ

前記

置タリ  
木葉下村鎌倉坂と云所ニ三夜栗河初む統鎌を強め又花さ

きそ花鎌なるは又むさくさう是花三夜めのむ統鎌みあふぬ

と云ふ。其を夏の土用後十日より作る志のつと荷く荷くすう七十者

同ハハハハ小鎌を括り出よと云ふは其由是も土地よりべし

生氏の所務ニ御座候左すれハ神領となりし時大祢宜此地館を構へ  
居候故苗氏ニ羽生と申と相見候今の沖洲八木蒔倉数辺迄皆

橘郷中ニ可有之候茨城より行方ニ入申候ハ何年の事か相知不申候

御改正南郡絵図ニ霞郷可尋と御書置被成候所此度霞郷ハ富田

村ニ御座候証拠ニ見出し申候猶跡より可申上候右之通小宮山氏より

申来故郡鑑をも見しに富田村館跡ニ霞と云へる字あり橘郷も

一 羽生村鎮守も橘明神御立山の字ニも橘と云ありき 以上追加

富田村香澄郷ノ事

前二記シ

置タリ

一 <sup>ア</sup>木葉下村鎌倉坂と云所ニ三度栗あり初の花毬イガを結ふ頃又花さ

き其花毬ニなる頃又花さくしかれ共三度めの花ハ毬本ノママにハならぬ

と云り蕎麦ハ土用後十日より二十日迄の間ニ蒔く蒔てより七十五日

目ニハ見ずに鎌を持って出よと云ならハす由是も土地によるべし

一 近年田を植ふる村よりして二千日植と云ふものあるは昔の苗代を伴得て  
より二千日色く植ふるものあり田の多き所を以て小千繰りしよりして植  
又取花を作る村より花摘と曰植同し此の所なるより二千日植と  
云ふは少くやせる方なりと云ふの植旬ハ五六十日目と云ふ  
身も村よりして遠の所より又植と云ふの植旬との中程なる  
うすす虫分くと云

一 大野々の用は備前極ハ慶長十五年庚戌伊奈備前守忠次堀た  
るより善後諸所より鈴木金次善後徳の所より大野村平大膳  
植園より

此は海東向深島向の園を云ふ

一 近年田を植るに村によりて三十日植と云事はやる是ハ苗代を仕付て

より三十日過て植る事なり田の多き所ニテハ手繰りよろしとて植る

又紅花を作る村ニテハ花摘と田植同し頃なる故専ら三十日植を

する也土地ハ少しやせる方なりと云常の植旬ハ五六十日目迄なり

是も村ニよりて違ひあり又早植と常の植旬との中程ハよろし

からず虫付くと云

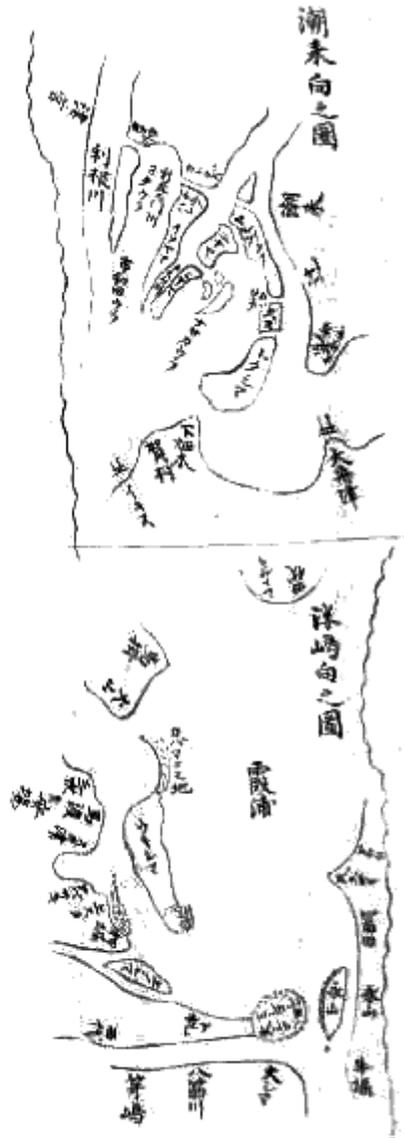
一 大野郷の用水備前堀ハ慶長十五年庚戌伊奈備前守忠次掘た

るなり普請御奉行鈴木金太夫普請の次第ハ下大野村平戸大膳

指図なり

次に潮来向浮島向の図を出す

一 玉造村在念白井小邊(仔勢志宮)と云う道以りたる左尾濃ハ勿荷(尾濃)に近  
 國出地より一き車と云ふに十二と云土此は方の吾死位(尾濃)の土地と云ふ  
 る(少)より其の土地ハ三雜石其外諸島(尾濃)を如小邊(尾濃)に十二の年貢納  
 と云(尾濃)より上(尾濃)の田ハ米畑ハ畑米と云(尾濃)の米法(尾濃)と云(尾濃)  
 三百姓の村と云ふに(尾濃)の家(尾濃)ハ小サク(尾濃)ニ衣(尾濃)ハ(尾濃)ハ(尾濃)ハ



一 玉造村庄屋白井小衛門伊勢參宮に登り近頃下りたる故尾濃ハ勿論其近

国土地よろしき事を尋しに十一二取と云土地ハ此方の五ツ取位の土地と見るなり五ツ取の土地へ三雑石其外諸懸り物を加ふれハ十一二取の年貢納と同じ程なり上方筋ハ田ハ米畑ハ畑米とて納め外諸懸り物なしといへり百姓の体を見るに家居ハ小サク奇麗ニ衣服も常にハ僮服なれとも

潮来向之図



浮嶋向之図



それらも付いよき老後さうして云々在業の全精いり有り。新い早を以て  
きて出たも早を以ていへ。田畑の精に少いのちも何と極付たり  
七歩八歩より十二歩の子路のよきを以て申はさし。旅人愛く  
れよしむいそのまゝもむる。膝すいぬ物あり。一歩二歩の何をも  
求まに侍るも愛にねよといふ友を程いとのまゝす。一い(注法)  
て好ま愛人をもよふ友をいふ何なるかのめきと同一にせよといふ。唯  
みい村人のすけり。海をさすす。一い(注法)隣の子は海をさす。海に  
に海は海もさす。一い(注法)親の志は違ふ。一い(注法)海をさす。海に  
さす。海をさす。一い(注法)親の志は違ふ。一い(注法)海をさす。海に  
ない。親の志は違ふ。一い(注法)親の志は違ふ。一い(注法)海をさす。海に  
さす。海をさす。一い(注法)親の志は違ふ。一い(注法)海をさす。海に  
さす。海をさす。一い(注法)親の志は違ふ。一い(注法)海をさす。海に  
さす。海をさす。一い(注法)親の志は違ふ。一い(注法)海をさす。海に

はれなる時ハよき着服なりと云農業の出精いふ計なし朝ハ星をいた、  
きて出夕も星を見て帰り田畑の端々少しの所<sup>ニ</sup>ても何ぞ植付るなり  
七歳八歳より十一二歳の子露のとうを取りて串にさし旅人<sup>ニ</sup>買く  
れよとひたものすゝむる故旅中いらぬ物なから一錢二錢のあたへ<sup>て</sup>  
求めハ傍なる子も買くれよといふ故左程ハとゝのさるよしいへハ泣出し  
て頻に買人事を乞ふ故所の人に何故にかくの如きと問へハ其子ともハ百姓  
又ハ村役人の子もあり錢をとらすにかへれば隣の子ハ錢を取り歸し  
に汝ハ錢も取らすとて親らの怒りに逢ふ故なりといへる故不殘買たる事  
なり此辺などにて役人の子ハ勿論百姓の子とても一錢二錢を乞ありき  
なハ親々もいやしき乞食のさまなりとてのゝしりしかるへし又農業  
に出るにも朝ハ日出し後煙草吸ながら鋤打けたけて出昼も草臥られ  
ハ昼寝もしつ夕ハ日の入比にハ帰り休ミて一生を終るなり是を上方筋



47952

のめく農業出稼せいかも、富るるとも、中、而も、其、比、の、め、く、  
 おま、り、や、せ、は、す、と、し、つ、つ、と、の、あ、ま、も、た、ま、れ、の、上、方、而、も、た、ま、は、  
 玉、も、上、國、と、い、ふ、座、と、い、つ、と、上、方、而、も、た、ま、は、前、年、値、及、何、米、料、と、て、  
 食、糧、不、足、ま、れ、の、當、年、の、畝、を、減、し、ま、け、こ、や、た、手、付、を、多、く、  
 加、へ、し、て、其、途、に、ま、ま、食、糧、不、足、ま、れ、の、當、年、の、田、地、を、惜、し、  
 作、ら、し、て、耕、ま、ら、ぬ、た、ま、け、も、仍、と、か、た、耕、作、も、お、た、廢、さ、  
 棄、ま、れ、た、り、收、納、は、た、ま、と、さ、し、も、せ、ま、ら、な、り、是、未、だ、の、こ、ろ、な、り、  
 と、か、つ、り、き、い、

右常陸國里老傳上之卷終

明治二十四年辛卯歲次冬十月吉辰寫

時年七十七霞嶽久米雅禮所藏

の如く農業出精せハ皆々富有となるへし中国筋にて此地の如く  
おふちやくせは中々くらしつゝくる事ならず左すれハ上方筋よりハ此  
国などハ上国といふへしといへり上方筋にてハ前年何反何畝耕して  
食物不足すれハ当年ハ畝反を減し夫たけこやしたすけを多く  
かくると云此辺にてハ去年食物不足すれハ当年ハ田地を増し請  
作などして耕す故こいたすけも行と、かす耕作も土地広き故  
亀末になり収納ハ左ほと過しもせさるなり是等ハ尤の事なり  
とかたりき

右常陸国里老伝上之巻終

明治二十四年辛卯歲次冬十月吉辰写

時年七十七霞嶽久米雅禮所蔵









※ 原本には、茨城県立図書館所蔵「里老傳常陸地理誌（みちくさ集）[001050906831]」を用いた。

---

---

翻刻 里老傳常陸地理誌（みちくさ集）

発行日 平成二八年一月三十一日

編者 茨城県立図書館

郷土資料整理ボランティアグループ  
唐沢矩子、金沢多恵子、木村寿子、金原ヒロ  
辻 雅子、中山真一、堀江克己、山崎弘道  
柚原俊一、綿引文子（五十音順）

事務局 茨城県立図書館情報資料課 長山尚子

発行者 茨城県立図書館

〒310-0011

茨城県水戸市三の丸一―五三三八

---

---